江戸期における『金光明最勝王経』の開版

――蘭方医吉永升庵の偉業と弁才天信仰――

小島　裕子

はじめに

南海を経て請来した梵本を義浄が訳出した『金光明最勝王経』は、唐代の長安三年（七〇三）、則天武后の勅により長安の西明寺で漢訳された経典で、六本あったという金光明経（現存は三本）のうち、最新の訳経としてわが国に請来された（以下、義浄訳を『最勝王経』と記す）。その請来の経緯を示す記録は見いだされないが、すでに養老四年（七二〇）撰上の『日本書紀』欽明紀の仏教関係の記事に同経を用いた記述が認められ、神亀二年（七二五）の国家平安の祈りには従来の『金光明経』の旧訳（四巻本・八巻本）に加え、新訳の『最勝王経』の転読が行われたことが知られる。[1]訳経から半世紀を経ぬ天平十三年（七四一）には、聖武天皇の詔による国分寺制度のもと、僧寺を「金光明四天王護国之寺」と称し、諸国の七重塔内に配置されることで全土に広まり、時に紫紙に金字で書写された国分寺経が今なお至宝（国宝）として現存する。その後、平安時代に至ると、同経は宮中の御斎会で講ぜられ、また薬師寺最勝会とともに

南都三会の已講を勤めた僧侶の律師補任の階梯に関わるという権威を象徴する経典となった。同経の受容についてはその註釈や法会記録をもって少しく辿り得るが、一宗の所依の経典とならなかったことや、国家的な講讃が継続されつつも、広く講経の場がもたれなかったことにより、「法華滅罪之寺」の国分尼寺経となった鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』とは流布の様相を異にして現在に至る。[2]

本稿に先行する拙稿「江戸期正徳版『金光明最勝王経』とその信仰――井伊直治願経、訓読、浄厳の陀羅尼梵音のことなど――」（以下、「前稿」と称する）[3]で取り挙げた慈高山金剛院（武州八王子、高野山真言宗）に所蔵される『最勝王経』は、請来からおよそ千年を経た江戸時代の正徳三年（一七一三）に開版された経典であるが、[4]諸本の校合を経た本文の確定と、その開版に至る実態を版内の随所に辿り得る極めて特異な経典として、歴史に記憶すべき文化的価値をもつものである。この江戸湯島霊雲寺蔵版として印刻された「正徳版経」は、訓点を多く含み、漢語・梵語に仮名訓を付し、本文を訓読するといった、「訓（よ）むテキスト」として注目し得る経典であり、精緻な変相図のほか、各品に曼荼羅を配して唱導されたと思しい形跡を経内に留めている。

そうした正徳版『最勝王経』の意義を見定め、解題を附すべく記した前稿で、刊記に認められる「願主直治寂紫子」を近江国第四代彦根藩主井伊直興公（直治）に比定してみたが、脱稿後、翻刻紹介をめざす作業に着手し、開版の地である湯島と弁才天信仰について少しく検討を重ねるなかで、もう一人の「直治」を名乗る人物の存在が浮上した。正徳版の開版に直治公の願意が込められたことは、前稿で指摘した『正一位秋葉山大権現略縁起』における「金光明最勝玉経 檀主井伊直治」という記載によって相違ないが、刊記に「願主直治寂紫子」と記し、異本校合による本文の確定や細密な訓点や注を施し、校訂を繰り返すという、実態として断続的な経文研究を試みていたのが吉永升庵（よしながしょうあん 一六五六―一七三五）と称する長崎出の蘭方医で、直治公とは昵懇の関係にある人物であることが新たに判明したのである。この事実へと明かし導いたのは、ほかならぬ弁才天信仰にまつわる記録であった。『最勝王経』

巻第七と八にわたり「大弁才天女品」があり、同経の流布の一端に弁才天信仰を背景にもつ事例が見受けられる場合があるが、『最勝王経』と升庵とを結びつける記録は、まさに升庵が篤い信仰を寄せた相州江島の弁才天関連の資料の中に刻まれており、資料を披見するなかで、当該の『最勝王経』の開版が研究領域をはるかに超えた視座をもって見定めるべき遺業であると、あらためて了知するに至った。

一人の蘭方医が、当代の最先端医術である蘭学に傾けるのに等しく、『最勝王経』という経典に情熱を注いでいたという歴史的事実は誠に興味深い。吉永升庵の伝記（以下、総じて「升庵伝」と記す）によれば、当該の「正徳版経」は説法に用いられた「金光明最勝王経宝塔曼荼羅」一具とともに、升庵没後に寄託された寺院において焼亡したとあるから、それと同一摺り版の一式が現存し、一寺院の経蔵から見いだされたことは極めて稀有なことであるといえよう。そこでひとまず本稿では、前稿において至り得なかった点を補うべく、開版に至る諸事の経緯を新たに「升庵伝」のなかに見いだし、歴史の中に跡づけて、「正徳版経」の本文紹介を期す当該研究の進展をはかることとしたい。

一、江島弁才天信仰の中の「升庵伝」――『吉永升庵一代行状記』の資料的位置づけ

吉永升庵は、江島弁才天信仰の研究の領域（歴史・縁起・説話等）において、鍼灸で名を馳せた杉山和一という検校とともに知られる。正徳版に刻された「寂紫」という人物が、蘭方医の吉永升庵であることを明かすのは、夙に是沢恭三氏が『江島弁財天信仰史』[5]に紹介した『吉永升庵江嶋弁才天女霊験一代行状略記』（別名『誠唸社漫録』、以下『升庵行状記』と記す）と称する伝記的な記録であった。同記は『国書総目録』より、江島岩本院、国会図書館、および東京国立博物館に写本が所蔵されていることが知られるが、そのうちの岩本院蔵本については、鎌田文子氏の「「吉永升庵一代行状記」完」解題」に、翻刻をもって紹介がなされている。[6]

しかしながら、一般的に同資料に対しての注目は弁才天信仰にまつわる記述が専らで、升庵が生涯を費やした『最

勝王経』開版の遺業についてはいまだ記録の内に留められ、読み解かれぬままの記述が多く残されている。[7] 前稿で考究した正徳版『最勝王経』内に挙がる徴証と、この「升庵伝」との符合が幾重にも認められることにより、こと経典研究においては、分析の対象となるテキストが如何なる経緯のもとに構築されたかという背景を知る上で極めて貴重であるといえる。また升庵が心血を注いだ同経にまつわる記述を、「正徳版経」の研究に具体的に照合することで、分野を亘る双方にさらなる歴史的視座が開けるものと思われる。そこでまず本節では、この岩本院蔵『升庵行状記』の構成について検討し、資料価値を可能なかぎり見定めた上で、次節以降の考究に備えることとしたい。

この吉永升庵の一代記として知られる『升庵行状記』は、外題を「吉永升庵一代行状記　完」とし、内題を「吉永升庵江嶋辨才天女霊験　一代行状略記」とする仮名書きの記録である。[8] その序の末文にあたる識語には、次のように記されている。

予は、寂紫末弟にして遺戒を受け、常に医を斅び、暇時、時にまた一生の行業を聴く。故に今ここに其の概略を記して、ただ遺忘を備ふるのみ　高嶋升栄謹識　（原漢文）

吉永升庵寂紫の弟子であった高嶋升栄が、医道の傍らに聴いた師の仏道修行（行業）についての話を、その廃忘を怖れ、「一代略記」として編纂したものと知られる。全体を見渡せば、升栄の述作がその前半にあたり、後半は升栄外の述作が添記されるかたちで一書がなされている。本稿の注目する経典研究の資とする記録は升栄の述作（以下「升栄記」と記す）にあることはもちろんのこと、升栄の述作外（以下「外伝」）にも負うところが大きい。

まず、『升庵行状記』の全体構成を一覧すべく、各段の事書を挙げて仮に目次をなしてみるならば左記のごとくである。

『吉永升庵一代行状記』仮目次

＊各章段については仮に番号を付し、章段名については各段の事書等をもとに私に訓読した。なお、事書の体裁をとらない

段については、ほかの段に准じ、（　）内に事書を補った。本稿で引用する『最勝王経』に関わる段を四角で囲んだ。

本体「升栄記」（弟子高嶋升栄述作）

（一）寂紫出生の事

（二）寂紫一生疱瘡せざる事

（三）寂紫、稲葉正則公より構へを得たりし来由（の事）

（四）江嶋二百日海中行幷びに感応の事

（五）江の嶋海中行願意の事

（六）寂紫、稲葉正則公の許容を蒙る事

（七）寂紫、江州大洞山開基の事

（八）辨才天・吉祥天造立の事

（九）寂紫、遠州秋葉感応、幷びに建立不足を加ふ（事）

（十）私里人の云はく、鳥居元彦根城主御代々御建立　若し棒杭折り候ふ節は、かもん様より金五両宛出で候ふ由（寂紫、秋葉山に井伊公建立の鳥居の額字を書せし事）

（十一）金光明大曼荼羅の事

（十二）金光明経開版次第の事

（十三）霊鷲山仏座石来由の事

（十四）大清人十筆金光明最勝王経の事

附録「外伝」（**弟子高嶋升栄述作外**）

（附録一）升庵命終の事

（附録二）寂紫居跡を升栄、覚樹王院へ譲り候ふ事

（附録三）恐れながら書付をもって願ひ奉り候ふ（升栄、大曼荼羅・仏座石等開帳願ひ候ふ下書の事）

抜書「要略集抜書」（正林光澄著『弁財天諸説要略集』抜書）

（抜書）吉永升庵江の嶋の利益を蒙る事、幷びに最勝王経印刻流布の事

追而書

岩本院蔵『升庵行状記』は、弟子の升栄による十四段の述作である「升栄記」の後方に、「外伝」の【附録】と【抜書】が附されて一書を成している。全五十丁（墨付）のうち、ほぼ半ばにあたる二十四丁表に「附録」と記す扉一紙を設け、二十六丁表から【附録】の本文があり、さらに三十七丁表に「諸説要略集中升庵伝抜書」と記して、三十八丁表から【抜書】の本文が記されている。【附録】と【抜書】がそれぞれ独立した体裁をとっていることから、「升栄記」を補足するかたちで書写され、合冊されたものと推測される。「升栄記」の末尾（二十三丁裏）には、「終 高嶋升栄述」と書き留めて改行し、次のような記載がみられる。

異説の一代記これあるといへども、升栄述ぶるところの記には、直興公御治療の事、大森使者行合等の事、或ひは鵜木光明寺蛇形弁才天の事、仏乗院因由の事等はこれ無きなり。

右の識語は「升栄記」にはない異説の「一代記」の存在にふれ、その事象を指摘し、後方に位置づけた【附録】の冒頭に、次のような文面を添えて、以下に「升庵命終の事」、「寂紫居跡を升栄、覚樹王院へ譲り候ふ事」、「升栄、大曼荼羅・仏座石等開帳願候ふ下書（恐れながら書付をもって願い奉り候ふ）」という、升庵没後を語る三段を引く。

高嶋升栄は吉永升庵直治寂紫子の門弟なり。寂紫没後猿江居跡家財雑具・経版等すべて譲り請け、猿江に居住す。師寂紫没後四か年目に寂紫造立の弁才天曼荼羅仏像等、公儀へ御免を蒙り、元文三壬午年八月十日より十月十日まで、日数五十日の間、本所一つ目高野寺大徳院におひて開帳す。また、「猿江の升庵居跡を覚樹王院へ譲りし

事」、「升庵命終の節の事」は、升栄著述にはあらざれども、物語し事、なせし事等を一二條挙げて、因みに記すのみ。

さらに「外伝」三段の末尾には、升庵没後を取り仕切った升栄の命終のことが次のごとく附記される。

高嶋升栄は丙午の火災、甚だ痛んで老の身に侮る事かぎりなく、心痛にや、寛政二庚戌年五月廿五日、本所一ツ目町宅におひて九十四歳にして寂す（いま升栄が跡、本所一つ目にあり。）

こうした「外伝」の冒頭と末尾に配された記述に視点を注げば、升栄の言動などをも筆録し、その終焉を見届けるかたちをもって、第三者が客観的に『升庵行状記』の中にそれらを加えて編纂した跡が見てとれる。たとえば「（附録一）升庵命終の事」の本文の末尾には、「行状記には畏れて記せずと升栄物語るなり」とあって、升栄が師の最期の様子を敢えて行状記には入れなかった話であったと知られる。

また、【外伝】に次ぐ【抜書】の本文部の冒頭には、【附録】と同様、升栄の述作でない著述を『要略集』三巻の中から抜書して記す次のような識語の後に、「吉永升庵江の嶋の利益を蒙る事幷最勝王経印刻流布の事」という長文の「升庵伝」が添記されている。

要略集三巻は西の窪正林光澄の著述なり。升栄が著にはあらざれども、栄が述ぶるところと符合なるがゆゑに、ここに添へ記すのみ。

右に『要略集』三巻とあるのは、正林光澄の『弁財天諸説要略集』（『諸説要略集』）上・中・下三巻と考えられるが、現存して披見することが可能な上巻には当該の「升庵伝」が見いだされないことから、中・下巻のいずれか（おそらくは「諸説要略集中升庵伝抜書」という表記から中巻か）に収載されていたものかと思われる。[9] それは升庵の『最勝王経』の印刻に関する有益な内容を伝える【抜書】（以下、「要略集抜書」と略述）であり、また所在が確認されぬ現段階においては『諸説要略集』の逸文でもあって、岩本院蔵の『升庵行状記』の資料的価値を高める添記として注目される。

この「要略集抜書」の跋は、『諸説要略集』に当該の「升庵伝」がいかにして収録されることとなったかの経緯を示す光澄の識語を含み込んで、来歴の確かさを明かすとともに、伝記生成の過程を垣間見ることができるものである。

吉永氏、江の嶋冥祐を蒙ること、弁財天信仰の輩は普くその霊応を語り伝ふるといへども、その説一定ならず。宝暦七丑年六月、寂紫の菩提所仏乗院春岳阿闍梨に相見して、寂紫居士の行業記を尋ぬ。春師一書を出し、予に示して曰く、「この書、升庵存生に自ら書し置かれたる弁財天の霊現なり。当寺に緘秘して他見をゆるさずといへども、兼て子が志を知るがゆゑにこれを見せしむる。」と。予、感悦して披閲するに、升庵在世にあへるが如し。感歎懐に溢る。即ち、密かにこれを書写す。時に六月八日己巳日なり。今ここに載するは取意採摘して記すのみ。かの秘書は三辨才天出現記と題せり。

元禄十一年吉永氏霊夢を感じて造立し奉る弁才天は、当時麻布今井氷川大明神の社地に鎮座し給ふ。御宮は公儀の御建立なり。尊像八臂の坐像なり。聖容殆ど江嶋本宮の尊影に似たり。その荘厳最も精麗を極む、世に比類なき尊像なり。要略集抜き書　終

右によれば、「要略集抜書」は、升庵自ら記した『三弁才天出現記』と題する直筆の秘書である「行業記」を光澄が書写し、そこから取意採摘した「升庵伝」であることが知られる。

ところで、この光澄には、『吉永氏弁才天造立秘記』（「三本尊出現之記次第不同」、以下『造立秘記』と記す）と称する別の著述もあり、冒頭に「吉永升庵直治寂紫子直筆之書写之」として、これもまた升庵自筆の記録を書写したものであることが知られる。弟子升栄の著述になる『升庵行状記』が「升庵は」と記すのに対し、升庵自筆本の『造立秘記』は「予レ（われ）」という一人称を用いており、双方に共通する段や、一方に採り上げられていない個別の段を相互補完することができる。この『造立秘記』もまた江島岩本院所蔵の写本として見いだされ、『江の島岩本院の近世古文書』に翻刻・紹介されている。(10)

『造立秘記』の奥書には、『升庵一代記』の「要略集抜書」跋に示された書写の経緯と重なる記載が認められ、双方を併せることでさらに詳しい実情が知られる。

宝暦三年酉九月廿三日書写し了んぬ。この書は吉永氏直筆。彼の菩提所東武三田の仏乗院に有りしを、本寺真福寺範公取り寄せ玉ひて予に見せしめ玉ふ。感喜にたへず、すなはち書写し了んぬ。林藤吉郎光澄〔花押〕

この『造立秘記』は、別名『三辨才天出現之記』とも題するごとく、元禄十一年（一六九八）正月、升庵が霊夢を感得して造立した弁才天に関する霊験記で、公儀の内道場に鎮座する尊像となった八臂弁才天坐像（江島本宮の尊影に似る）について升庵自身が筆録したもので、升庵にとって大厄を越えた節目となる事蹟を刻す特別な記録であった。右の識語により、升庵没後十有余年の宝暦三年（一七五三）、その菩提寺である三田南寺町の仏乗院（新義真言宗智山派）に所蔵されていた「行業記」を、愛宕下の真福寺（新義真言宗智山派）の英範公（二十・二十七代住持、後の智山第二十七世、一七三〇―一八〇四）が取り寄せて光澄に見せたことが機縁となり、書写の運びとなったという経緯が知られる。光澄が居した西の窪と真福寺とは同じ芝愛宕下にあって在所が近く（「江戸切絵図」[11]）、当時、江島弁才天の霊応として世に一定ならず語られていた升庵奇瑞の真相を求めた光澄が、範公との縁を介し、その自筆本をもって披閲・書写を叶えたというものであろう。

一方、「要略集抜書」には、その後の宝暦七年（一七五七）のこととして、光澄が升庵自筆の「行業記」を直接に仏乗院春岳阿闍梨から披閲し、書写することを得たとある。『造立秘記』は書立てによる記録で、項目によっては書写を簡略化した箇所が見受けられることから、おそらくは光澄が弁才天造立譚を中心に一部書写を行った後に、書写し残した『最勝王経』開版などに関する記載を写し取り、先の弁才天造立譚と合わせて一つの述作として『諸説要略集』に採り入れたものではないかと推測される。『升庵行状記』【抜書】のもとは、おそらく「升栄記」に引用された「金光明経開版次第之事」や「大清人十筆金光明最勝王経之事」などに類する升庵著述の記録をもとにしたこの光澄の述

作とみてよく、その記述に対する資料価値が認められよう。

これら『升庵行状記』や『造立秘記』を所蔵していた岩本院は、圭室文雄氏の研究によって明らかなように、慶安二年（一六四九）以降、古義真言宗仁和寺の直末寺となり、江島の惣別当として支配体制を確立するなかで多くの所蔵史料が構築された[12]。「升栄記」の書写に、『造立秘記』や『諸説要略集』の一部抜粋を「外伝」として書写・添書した岩本院蔵の『升庵行状記』の書写者は未詳ながら、升庵の生涯を見渡し、升庵自筆本を書写・蒐集した光澄の記録を自在に引用し、「升栄記」の不足を補うかたちで一書に編纂することを成している。かように生前の升庵・升栄師弟をよく知り得たのは、弁才天関連の記録を豊かに蔵した岩本院の僧侶を措いてほかに無いものと思われる。最末の追而書には次のごとく、天女信仰をより詳しく伝える書としての資料価値を厚くせんとする意向も看取される。

己巳ごとに　御奥より御代参あり。開扉帳を開き御拝あり。余人は御代参御開き跡にてしばしのうち、御拝願ふなり。もっとも己巳の日・巳の刻限りなり。天女信仰の輩は拝し給ふべし。

そこで、次節以下、これら岩本院蔵本の「升庵伝」をもって、正徳版『最勝王経』の開版に関わる事蹟を抽出し、経典本文から得られる徴証との照合をはかってゆきたい。なお、『升庵行状記』が識語を挟みつつ、原資料を綴るといった編纂の形態を重んじ、資料価値を優先して、できるだけ表記を刻まずに本文の引用を行うことをお断りする。また、正徳版経の経文の校訂者が吉永升庵の事蹟とみて相違ないと断定するに至ったのは、上述の鎌田氏の翻刻に与るが、引用する本文については同書が広く読まれることを期し、私に校訂した本文をもって提示することとする[13]。

二、蘭方医吉永升庵の略歴

本節では、「正徳版経」関連の具体的な事蹟を拾う前段として、『升庵行状記』および『造立秘記』から、『最勝王経』開版以前の升庵の略歴を辿ることをもって、爾後の考究に備えたい。「升庵伝」は江島の弁才天信仰を中心とする

升庵の修行や尊像の造立、および数々の霊験譚が記述の多くを占めており、そのことが彼の人格形成に深く根ざして伝記の伝存をなさしめ、ひいては経典を重んじる心の根底に流れるものと思われるが、紙幅の関係から、開版に関わる事蹟を中心に論じてゆく。その背景にある一生涯の機微については、本稿の末尾に編んだ「吉永升庵（寂紫）略年譜」を併せて参照されたい。

「升庵伝」によれば、升庵の父は吉永升庵寂翁と称し、肥前長崎の出で、菊池肥前守寂阿の末葉であったという。ちなみにこの祖先である寂阿は、元弘の乱で後醍醐天皇の錦の御旗を負い、鎮西探題を攻めて討ち死にしたことが『太平記』に語られる人物である。その流れを汲む父寂翁は長崎の地で医道を志し、正保三年（一六四六）より阿蘭陀の八師の伝授・印可を受け、外科医としての名声が高く諸国に知られていたという。[14] 寛文三年（一六六三）関東へ召され、翌年四月（一六六四）、妻子や門下を引き連れて江戸へ来着している。明暦二年（一六五六）十月六日誕生の升庵は、この時九歳であった。

升庵は、長崎の尊覚法師の命名により、幼名を金太夫と称したという。『升庵行状記』には、「禅寺尊覚法師」とあるが、長崎市寺町に所在する医王山遍照院延命寺（現・真言宗御室派）がこれに相当しよう。当代、当地には切支丹宗が行われ、仏教・神道の弘布が押されがちであったため、元和二年（一六一六）に備前の真言僧龍宣により薬師如来を本尊として創建されたと伝えられる。[15] 同寺は長崎奉行所との関係が深く、同地に流行した疫病平癒や、入港する多種の船舶の航行安穏祈願の寺となった。尊覚法師はこの延命寺の第二世で、慶安元年（一六四八）より寛文四年（一六六四）まで在職すること十七年、明暦三年（一六五七）に奉行所立山役所の門を移築、学徳群を抜き経営の手腕あって、同寺の基礎はこの尊覚のもとで盤石なものとなったという。示寂は延宝八年（一六八〇）七月二十五日であるが、その在職時と升庵幼少期とが重なり、升庵への命名や所伝の大事「即身弁才天秘法」の伝授のことなどがこれに符合する。

一方、父寂翁の医術は天聴に達し、老中稲葉美濃守正則公より御典医に召し出される旨の仰せがあったが、これを

固辞したとされる。二、三年地方で治療を尽くしてから再度御吟味の上、召し出だされることを望み、正則公のもとに引き取られて療治に勤めたが、寛文五年（一六六五）十月（『造立秘記』七月）、四十九歳にして病により早逝している（法名を「心月院天誉源光日明大徳」と号する）。金太夫（後の升庵）十歳の時のことであった。父の死から程なくして、金太夫は正則公の依頼で宝慶院宗悦という人物を烏帽子親として元服し、「吉永升雲寂厳子」と改名、寛文六年（一六六六）十一歳にして長崎へ戻り、阿蘭陀の商館が置かれた出島において六年間、治療の学術を成した。その後、寛文十一年（一六七一）、十六歳の時に正則公によって江戸へ召し帰されている。

正則公は、寂厳子（後の升庵）が内外の科を通じて治療の妙手となったことを悦び、門弟牧野升朔、江川升徹を後見に付けて寂翁の家を相続させた。後に後見となった牧野升朔は、元禄三年（一六八〇）に五代将軍徳川綱吉公により町医者から寄合医師に登用されている。[16] 寂厳子はそうした正則公の手厚いはからいに辞退を願い出て、その勘気を蒙ったことになる。この時、自らを「寂紫」と改名したという。はじめて二十一歳に辞退を願い出、二十二歳、二十三歳と頻りに意を通して「高嶋喜庵」と号し、武州八王子村に退いて以後、母（有宝寿院妙智尼）を麻布日ケ窪の在所に留め、自身は十六年の間、主君の追放によって、常州鹿島、関八州など諸国を巡行している。療術の手立てをもちながらも、「隠医の志」は父寂庵から受け継いでいたと思しく、侍医として召し抱えられる不自由を忌避していたが、その後に医書の著述も確認され、その医療活動がうかがえる（後述）。

ところで、升庵の『最勝王経』との縁は、幼少の頃からと伝えられる弁才天信仰にはじまる。七歳の時に流行の疱瘡に罹患するも、忽然と現われた紅の小袖を着た美女から得た一封が弁才天の真言であると、尊覚の内見によって明かされ、秘法を受けている。そのことにより、延命寺本堂左傍に両親が弁才天と三宝荒神の宮社を建立したことなどが、生涯肌身離さず身に付けた彼の一封とともに深い記憶となったものと思われる。詮ずれば、経内の「大弁才天女品第十五之一」、「同第十五之二」、「大弁才天女讃歎品第三十」に依拠した当代の弁才天信仰の流行に負うところとい

えようが、同経に対する研鑽のはじまりは、江島で弁才天を祈願する二百日におよぶ海中行において、「金経弘道」の誓願を立てて霊験を得たのを機に（三十八歳）、翌年再び江島で勤行後に霊験を得て「金経陀羅尼」（弁才天品の陀羅尼であろう）を唱えるといった実践行を伴うあたりから顕著になっている。なお、経典に対する見識を高める契機となったのは、諸国巡行中の三十歳前後に那須の雲厳寺で一切経を披閲したことにあったと『升庵行状記』に記載される。

版経の開版に至る以前の井伊直治との出会いについての記述はないが、おそらく直治の持病の治療に関わったことが機縁となり、たまさか両者が同年の誕生であったこと、双方ともに弁才天に対する篤い信仰をもっていたことで意気投合し、さらに元禄十年（一六九七）の四十二歳の大厄（父寂翁の三十三回忌にあたる）に臨んでその関係が深まったのではないかと考えられる（三節）。その翌十一年（一六九八）の正月に夢告を受けた升庵は、井伊直治を筆頭に諸大名の施与と御内の女房らの献上、職人らの合力により、年の内に弁才天像を造立し、内道場に安置するといった一大事業を果たしている。注目すべきは、この大厄を前後する四十一二歳頃から、還暦を目前に「正徳版経」の印刻を果たした正徳三年（一七一三）の五十七八歳の間に、再三に及ぶ『最勝王経』や同経の縁起類の開版、「最勝王経曼荼羅」の作成などが行われているのが確認されることである。この間の事蹟については、経典関連の事蹟を考究する五節で具体的に見てゆくが、正徳三年の干支が癸巳で弁才天の巳歳にあたることから、江島の下之宮の三十三年目の開帳（三月四日より七月まで百日行われた）が印記完成を目指す歳として念頭にあったのではないかと考えられる。

加えて、上記の『升庵行状記』や『造立秘記』の「升庵伝」以外から補うべきこととして、少しく医書を辿れば、初期の蘭学を修める医師としての事蹟が浮かび上がってくる。版経の刊記に「直治寂紫」を名乗るまでの経緯や、「医師にして経典の開版に力を注いだ人物」の「真意」を捉える考究に深く関わることゆえ、門外の身ながら、以下に医学史における寂翁および升庵について記し添えておきたい。

そこで、あらためて弟子高嶋升栄の『升庵行状記』の序の冒頭を見るならば、そこに当代において「隠医」の道に

生きた師に対する弟子のまなざしが目にとまる。

それ寂紫は蘭流医統の長家なり。儒は諸家を極め、医は三越に斃せ、神は吉田に求む。もって博く通じ、深く貫く。恪しむかな、幼にして嵩陽の尊覚をして仏に志す。もってすなはち世業の流、医術の密に慊らず。しかりといへども、ここに医は肉病を治め、仏は心痾を治む。詮ずるところ、医道の仁慈にして、あになんぞの別ならんや。（以下略）

「蘭流医続の長家」と称されるように、升庵が父とともに阿蘭陀流の医学を継承しつつも、幼少に医王山の尊覚阿闍梨に就いて仏道を志すようになったことが因となり、ひそかに医術に飽き足らず、「隠医」の身を貫くようになった。右は、「医術は肉体の病を治し、仏道は心の病を治すのであるから、仁を行う医とどれほどの異なりがありましょうか、いずれにおいても仁術の道を求めることにかわりはないのですから」という、志をもって生涯を貫いた師への愛弟子からの手向けのことばと読める。

その父寂翁の生国は「九州肥前国唐船の集津長崎」（『造立秘記』）であり、「常に医道に志し、正保三戊年より蘭国八師の伝を受けて、おそらく通じ、印可を蒙り、家に伝へて外科に名あること諸国に流れり」（『升庵行状記』）と伝えられる。先述したように、寂翁は短命にして寂紫が十歳の時に四十九歳で他界しているが、正保三年（一六四六）に蘭国八師の伝を受けたとあるから、二十代の後半で最初期の蘭方に触れ、医術を身に付けた人であったらしい。阿蘭陀人の我が国への来朝は慶長三年（一五九八）頃とされ、阿蘭陀商館に医師が常駐するようになったのは、商館が平戸から長崎の出島に移った寛永十九年（一六四二）の頃とされるから、まさに初期の蘭学を学んでいたことになろう。少しく調べを進めるうちに、江戸初期におけるカスパル流の阿蘭陀医学研究の泰斗ヴォルフガング・ミヒェル氏の論稿の中に升庵父子について言及された記述に遇い、それを糸口に「升庵伝」を裏付ける医学史の業績に多くを導かれるところとなった。[17]

彼（稲葉正則）の江戸屋敷での侍医、吉永升庵の名は「阿蘭陀加須波留方」の一つに添えられた短い「外科名寄阿蘭陀流」に見られる。吉永升庵はオランダ人からもヤン・シュラム Jan Schram」と呼ばれ、一六五〇年に記録を作成したか、あるいは猪股兵衛か他の通詞の資料を江戸で入手したようである。升庵とその息子は、後にシャムベルゲルの後任者のもとで西洋の外科学をかなり集中的に学んでいる。

ここに父寂翁が吉永升庵を名乗り、ヤン・シュラムと呼ばれていたこと、升庵という称が後にその息に継承されたことが知られる。いわゆる升庵寂翁と升庵寂紫の父子である。稲葉正則が寛文元年（一六六一）にシャムベルゲル（Caspar Schmburger）から腕の治療（筋痛治療）を受けて以来、阿蘭陀医学へ深く傾倒したことはその処方箋の現存とともに医学史において広く知られるところであり、そうしたことが、父寂翁が正則に侍医として仕え、没後は息升庵と門弟が医術の研鑽に対する強い意向を受けたという「升庵伝」の記述の背景にあったといえよう。[18]「升庵伝」には、父寂翁が寛文五年七月に命終したことや（行年四十九歳）、三十三回忌の追善供養などの記述があることから、その誕生は元和三年となり、生没年（一六一七―一六六五）が明らかとなる。正則がシャムベルゲルに治療を受けた寛文元年は寂翁四十五歳、息升庵は六歳で、同三年（一六六三）に江戸へ参向する二年程前のことになる。その寛文元年から翌二年にかけて、父寂翁が蘭医から医学を学んでいるのが確認される。升庵父子の活動が蘭学史の初期にあたることから、その実態を具に追うことは医学的にも医学史的にも難いが、散見される医書の著作から新たに辿り得る事象や、「升庵伝」に合致する事象を拾うことができ、「隠医」として経典の開版に力を尽した人物、吉永升庵寂紫の半生を知る上で貴重である。

たとえば、吉永升庵伝・吉永升雲編の『阿蘭陀外科正伝』や、軍事外科書の嚆矢となる『軍陣金瘡秘極巻』といった父子による著作、『阿蘭陀外科明鑑』抜粋（升庵寂紫著作）などがあるが、[19]とりわけ本稿に多くの示唆を与えてくれたのが『当流伝記要撮抜書』という、一巻の一流伝授の血脈であった。[20]そのうちの「伝法系図式」という条に、オラン

ダの当流の始祖「是祢羅軽座阿留（仮名訓「ゼネラケイザアル」）」から二百二十九代目の「阿留麻奴寸迦津（仮名訓「アルマヌスカツ」）」に次ぐ二百三十代目として、「吉永升庵 恵鍛軒寂翁子（仮名訓「ヨウガケンジャクヲフシ」）」、二百三十一代の「多尓江留（仮名訓「ダニェル」）」までが記されている。巻奥には左記のごとき署名・捺印が施され、「延宝九辛酉歴六月三日」と明記があって、法流医名「山名升楗丈」に宛てて授与した文書と知られる。

一流開白元祖　陽徳庵老人恵鍛軒　吉永升庵寂翁子（朱印三顆）
第二祖　陽向庵扁華軒　吉永升雲寂厳子（朱印三顆）

これによれば、父寂翁はカスパルシャムベルゲルから始まったカスパル流外科（紅毛流外科）の流れを汲む、アルマヌスカツ（阿留麻奴寸迦津、万治三年渡来―寛文二年九月二十三日帰帆、在日期は一六六〇―一六六二）から外科（膏薬療法・膏油製法）の伝授を受けていたことが知られる。[21] 師アルマヌスのもとには、河口良庵春益、嵐山甫安、瀬尾昌琢がいたとされるが、[22] その師からの一流伝授を示す血脈に、父子の署名に升庵の改名の由来を拾うことができることは、開版の願主として記された「直治寂紫子」の名を読み解く上で極めて有益な手がかりとなる。オランダにおける伝授の抜書から始めて長崎出島における記述には、『升庵行状記』にあった父寂翁が伝授を受けた「蘭国八師」の名が具体的に連ねられるなど、蘭方医升庵のルーツが膏薬方合の大事とともに縷々綴られる貴重な資料である。延宝九年（一六八一）は、升庵二十六歳にしてすでに稲葉公のもとを去り「隠医」の道を歩みはじめた頃にあたり、まさにそのめざすところがこれにより看取される。

またその一方で、升庵寂紫には『医教正意』を著した草刈三越の腹診を学んだことを示す『三越先生腹診伝』（内題「草刈三越先生腹診秘傳」）という著述もあり、病の各論の末尾に「老師曰」の口授が記され、根本昌庵の書写奥書の前に「吉永升庵寂巌子誌」とあって、その識語から師三越から受けた口授を「老師遺亡之書」として筆録した寂厳子時代の受講録であると知られる。『升庵行状記』の弟子升栄による序に「医は三越に斅せ」と記されたのがまさにこれに

該当しよう。升庵が外科のみならず当代一流の内科をも治めていたことが知られ[23]、幕府の医師となる道を固辞した先に、医業へのさらなる専心と、経典の開版とが表裏一体となって進められてゆく経緯をあらためてここに確認することができる。

三、「吉永升庵直治寂紫子」と井伊直興（直治）

さて、前節を受けて、「正徳版経」の刊記に刻された「直治寂紫子」を考察すべく、升庵の略歴を辿ってゆくと、その生涯におけるたびたびの改名が確認される。考証の要のため、あらためて現在把握し得る改名歴を付すならば、次のごとくである。

「金太夫」　幼名（尊覚法師より賜る）
「寂厳子」　元服時の命名（烏帽子親宝慶院宗悦による命名か）
「陽向庵扁華軒 吉永升雲寂厳子」　医書（『当流伝記要撮抜書』他）においては「寂厳子」を名乗る
（父の「陽徳庵老人魚鍛軒 吉永升庵寂翁子」に対する）
「寂紫」　「隠医」を希望、主君の勘気を被り改名
「高嶋喜庵」　主君のもとを離れ、諸国順国にあたり改名
「吉永升庵寂紫」　医師の父吉永升庵寂翁を継ぎ、升雲寂厳を改め升庵寂紫と名乗る
「吉永升庵藤原直治」　正林光澄『諸説要略集』（「要略集抜書」冒頭）（『造立秘記』「藤原直興公」の称）
「直治寂紫子」　正林光澄『吉永氏弁才天造立秘記』（『造立秘記』）冒頭書写識語
「直治寂紫子」　「正徳版経」、「宝暦版経」他、刊記願主名

「正徳版経」の刊記に願主として明記される「直治寂紫子」という記述は、正林光澄『造立秘記』の冒頭書写識語

にも「吉永升庵直治寂紫子直筆之書写也」のごとく認められる。「寂紫」については前稿で、「寂紫子」は釈尊の異名である「寂業師子」から釈迦の弟子「仏子」としての意かとし、加えて『最勝王経』「除病品」に登場する持水長者の子流水長者を「長者子」と記すごとく、「寂紫子」としたものかと思われるなどと考察するすべの無い中で推測してみたが、『升庵行状記』、『造立秘記』および『当流伝記要撮抜書』などの医書における記載の出現により、正しく流水長者の父子の医師の話が寂翁と寂紫親子に重なること、また祖先に「寂阿」がおり、父が「寂翁」であることから、代々「寂」を継承する家であることなどが新たに判明した。

医書においては「吉永升雲寂厳子」と名乗っていた経歴を踏まえれば、医師である父から「升庵」を継ぎ、「升雲寂厳子」から「升庵寂紫子」への改名を辿ることができる。当代の儒学と医学の密接不可分な時世を背景に置けば、「子」は儒者の敬称に則し、朱子学者の称号に倣ったものとみられるが（たとえば寂翁と同時代の蘭医向井元升が「観水子」と号したごとく）[24]、心内的には先述するところの「仏子」という意の方に自ずと移ろっていったのではなかろうか。「寂紫」の「紫」は、「升雲」からの連想で、「隠医」の身として仏法を重んじたことから、「昇る雲」から仏法的世界観を導く「棚引く紫雲」へと展開したものとみてよいだろう。升庵の望むべき生き様が、その時々の名に反映されていることは興味深く、「寂紫」はその最終的な境地を表わす自称として用いられたものと思われる。

一方、「直治」であるが、前稿でもふれたように、第四代彦根藩主井伊直興公（一六五六―一七一七）も、幼名吉十郎―直興―直治―直該―直興と四度の改名を重ねる中で、「直治」を名乗っていた。すなわち升庵と直興の双方が同名を名乗る場面があったということになるのだが、そのことを読み解く上で手がかりとなる伝承が元禄十年のこととして『升庵行状記』と『造立秘記』抜書の双方に見いだされる。

井伊少将掃部頭直興公、先年癈腫破レテ衆医及ビズ、命既ニ危アリシ時、予レ初メテ召シニ応ジテ十有余月ニ至リ治療ヲ加ヘテコレヲ痊（イヤ）ス。公、兼テ天女ヲ仰信シ給ヘリ。病中何時トナクツツムニモレテ、互ヒニ天女ノ法談

ニ及ブ。コレニヨリテ尊覚所伝ノ密法ヲ授ク。誠ニ過去宿縁ノ故ニヤ、大洞一山ヲ新立シ給ヘリ。（引用は『造立秘記』）

病の治療に召し出され、初めて井伊公のもとを訪れた升庵は、長くその病床の傍らに侍すなかで、互いが信仰を篤くする弁才天女を介して意気投合したことが記されている。さらに両者が深い縁により結ばれていたのがうかがわれるのは、生年を同じくし、四十二歳の大厄を迎えるにあたり、彦根城の鬼門に大洞弁才天堂を建立し、井伊公の命で升庵造立の鵜ノ木の三弁才天を本尊として勧請したということに象徴される（先述）。前稿では、大洞弁才天堂の建立について、「発願は直治の奇病を治した松島升順なる者の弁才天勧請の勧めによる」との伝承（堂鐘銘に升順の名）があるものの詳らかならずとされてきた通説に対し、僅かに『最勝王経』「大弁才天品」にちなむ直治の事蹟との見解を提示したが、さらに本稿において、『升庵行状記』と『造立秘記』の記述をもって右のごとくその事と次第が明らかとなった。升順は升庵の弟子で早逝した松島升順、すなわち当初江戸の鵜木光明寺に造立・祭祀された三弁才天の中尊であり、鵜木から近江の大洞弁才天への遷座に伴って、昇順の名が堂鐘に銘記され（現存）、直治とその奇病を治した吉永升庵（高嶋升庵）との弁才天信仰のもとで大洞弁才天堂の建立が果たされたことが新たに認められるのである。[25] このことは、左記の『升庵行状記』【附録】の「外伝」の記述をもっても確認されるところであり、直興の病気治療を介して、升庵に対する深い信頼が培われていたことが看取されよう。

寂紫を井伊直興公甚だ帰依したまふこと、先に彦根大洞山弁天建立にてはかりたまふべし。直興公御隠居なされ、御国元へ入御なされ、隠名を善翁と仰せられける。折々升庵を尋ねたまふ御書翰、升栄取持してありけること繁きゆへ委しくは記さず。

井伊直興の四度にわたる改名の経緯の中で、直治の名が確認されるのは元禄十四年（一七〇一）のことで、「直治」という名の由来については、病が直ぐ治ることを込めたことが推測されると前稿で述べた。あらためてこの両者の関

係を鑑みれば、「直治寂紫子」の称は、許しを得て「直治」の名を寂紫子に冠したものと推し測られるところであり、「直治」を冠する時は、その施主（檀主）に井伊直興がいたことが考えられる。秋葉山における『最勝王経』に関する事業で明らかな直興の施主としての立場から推しても、正徳版の開版に直興（直治）が財施を尽くし、その深い理解と庇護のもとで経典の校訂に力を注いだのが「寂紫」、すなわち吉永升庵であったと考えられる。同経に掲げられた「広行流布」という標語のもと、願主としての寂紫の名に施主としての直興の願意も込め、両者が一体となることで成就した正徳版の開版であった、と読みとくことができるのではないかと考えられる。なお、その開版を誓願した正徳元年八月を前に六月に直興の病が知られ、刊行が成った同三年正月を越えた八月に療養の湯治の事が拾えることから推し量れば、[26]「寂紫子」の上に直治の名を冠して行う経典の刊行成就は、直興の病気平癒への祈願の意も込められていたことが汲み取れるであろう。「寂紫子再考」として現時点で追考し得ることを記しおく。

『升庵行状記』の記述が「吉永升庵江嶋弁才天女霊験一代行状略記」という書名からも明らかなごとく、霊験譚としての宗教的記述をもつ側面はあるものの、弟子升栄が師の事蹟を微細に記したという性格から、事実に即した記述を多分に含む記録であることを明かしていよう。岩本院で編纂されたと思しい『升庵行状記』は、これまで詳らかでなかった「寂紫居士」に纏わる開版の歴史的事蹟を繙いてゆく上で、有益な事象を留めた記録といえる。

以下、次節以降、考究の対象とする『最勝王経』開版に至る経緯を明らかにすべく、『升庵行状記』をはじめとする「升庵伝」から経典関連の事蹟を拾遺し、辿ってゆきたい。

四、升庵寂紫と秋葉寺——神仏習合、神の護法を得て開版へ

さて、本稿の後半、経典の開版の実態を追う本節では、まず開版に臨むにあたって行われた神への祈願のことについて見ておきたいと思う。前稿において、自身の「正徳版経」への注目は、「正徳版経」を底本とする秋葉任超による

「宝暦版経（秋葉蔵版）」を能登の總持寺祖院の経蔵で披見したのを契機とするものであることを述べた[27]。それは正徳版と宝暦版の双方を所蔵する金剛院の聖教調査において両経に対する認識をもった時点にまで遡る。はからずも正徳版の研究を推し進めてくれたのは、祖院で再見することとなったいわゆる「宝暦版経」の刊記と、秋葉寺領内の鳥居に関する『正一位秋葉山大権現略縁起』[28]の記録によるところが大きい。「正徳版経」開版の背景に井伊直興公の存在があることを辿り得たのにはじまり、その開版を促した護法善神としての秋葉三尺坊大権現を介して解明されることの多きは、まさに権現に開版の所願がかけられたことに起因する機縁といえよう[29]。

『升庵行状記』には、「寂紫、遠州秋葉感応、幷びに建立不足を加ふ」（九）という、吉永升庵寂紫と秋葉山との関係におよぶ事の仔細が物語られている段の存在がある。

それ、寂紫、権現に詣せんと欲して秋葉山の麓に至りしに、山動じて登りがたし。昼より夜を待つといへども、なお頻りになり、ゆえに権現を念じ誓ひていわく、「我、燭（ともしび）を現じ山上に登ることをなすべし。必ず火を消しむることなかれ。熄へざるをもって感応とすべし。予、祈る所は『金光明最勝王経』弘通の義にして、開版をなし、また曼荼羅を描くなり。成就の年月まで室宅類焼を脱るゝこと冀ふなり。ゆえに今感応をうかごふために、即ち現燈を持ちて山に登るべし」。燭火熄へざるを感応と誓ひければ、たちまち一山風静まり、火光乱るゝことなし。参詣速やかなり。寂紫帰国して、永代日々、『金光明経』読誦の法施、および財施の供料を寄附し、山中に周く敷石をなし、山下より山上五十丁、左右一丁ごとに石碑を立て、坂（の）中段に一、二の鳥居を立て、上下前後の額を打ち、額の文字「金光明」の大字を書しし。これ寂紫が筆なり。私（に）寛政二戊年登山の砌に拝せしに、表（に）立額「寂金明嶺坂下村上」（と）あり、裏に横額「寂金光明大法輪」と草字にて横にあり。二の鳥居、一の鳥居の上にあり。「最勝関奉敕沙門は十三翁方面山書」とあり。

為威験増進一山繁栄　草字にて、この二行は一丁目より

為参詣諸人所願成就　五十丁目まで印す、寂紫筆。
最勝関ばかり別筆なり。

右は、升栄が升庵没後五十余年を経た寛政二年（一七九〇）に秋葉山を登山した折、師の登山当時を振り返って記したもので、升庵が『最勝王経』の開版と曼荼羅の造立に臨み、秋葉権現にその成就を祈願した折の霊験譚とともに語られる。正しく神仏習合の思想により、同経を守護する神として秋葉山が崇拝されていたことになるが、それは同権現が火伏の神であることによるところが大きかったであろう。「成就の年月まで室宅類焼を脱るゝこと冀ふ」とあるように、版木と料紙という最も火を懼れる経典開版が成就する時を迎えるまでの類焼を免れることを祈るものであった。これに次ぐ段の「寂紫、秋葉山に井伊公建立の額字を書せし事」（十）には、開版成就の僧供養があった十一月の翌十二月二十二日に焼失の事態に至ったものの、辛くも印記の完成が遂げられたことについて、「これ凶を后に押さへ、成就を先にすること権現の加護なりと評せり」と記され、誓願の成就は果たされたと解されていたことを知る。こうした升庵の秋葉山に対する信仰の契機は、すでに前稿で『正一位秋葉山大権現略縁起』の記録をもって述べたように、一の鳥居、二の鳥居を井伊直興が修復していること、その修復が先々代の二代直孝の時に遡って認められることから、遠江国引佐郡井伊谷に領地のある井伊家の作善を介してのことによるものであった。

この『升庵行状記』（九）（十）に収められた話は、いわゆる「秋葉蔵版」が開版された宝暦十年（一七六〇）から三十年後にあたる升栄の登山記録としても注目し得るもので、正徳版の存在を踏まえつつ、新たに宝暦の「秋葉蔵版」が開版された経緯を考究するために有益な詳しい事情が記されており、升庵の財施によって整備された鳥居や敷石、石碑の様子を復原的に想像することを促してくれる。「秋葉蔵版」の開版については、秋葉研究の立場から瑞雲院泰山任超に注目し考究した武井慎悟氏の詳論があり[30]、升栄が伝えるところの当該の霊験譚とともに秋葉山の宗教的世界観を介したさらなる解明が俟たれる。升栄登山の時点には存在していた一、二の鳥居の表に「寂金明嶺坂下村」、裏に「寂

金光明大法輪」と書されていたという額字は山内の変容とともに失われて今は無いが、万一にも揮毫の原書や額の木片が何らかの形で見いだされるならば、升栄の言にある通り、そこに升庵の自筆が認められることになろう。

五、『金光明最勝王経』の開版

さて、『最勝王経』の開版であるが、『升庵行状記』により、はからずも極めて有益な徴証を得ることができる。正林光澄著『弁財天諸説要略集』からの抜書とされる「吉永升庵江の嶋の利益を蒙る事、幷びに最勝王経印刻流布の事」に経典の印刻とその流布のことが詳述される（以下【抜書】と記す）。当該の【抜書】が、内道場に安置された升庵の弁才天造立について記す前段と、『最勝王経』の開版を記す後段とが一体となって語られる意味は大きいが、ここでは開版に関わる後段のみを引き、その実態が如何なるものであったかを捉えてみたい。それは本文部に「開版次第」の書立てが附記されるかたちで記されている。

且つ、吉永氏、この天の本経『金光明最勝王経』を信敬し、多く印刻して、唐音・和訓それ〳〵に改正し、幖紙・帙などいみじく荘厳し、人に施し読ましめ、自らも読誦供養せらる。

その印施の経は、宝永五年、最勝王経一部十巻（三品）、呉音に片仮名を付け印刻せらる。また、女人のために平仮名を付けて、一部十巻印板したまふ。両本ともに陀羅尼の仮字浄厳和尚（武州湯嶋霊雲寺開祖覚彦比丘）、経文の仮字密厳和尚、反相の図絵は阿存和尚、文字訂正は岸水庵、筆者は辻柳陰なり。宝永五年八月廿三日印板成就、広行流布す。

同六年己丑年秋、最勝王経縁起一巻、同勤要一巻、同供養行軌一巻合三巻（片仮字附一部平仮字附一部）書して、八月廿六日甲子日印板出来、普く施されける。

正徳三亥年、また最勝王経一部、唐音（南京音福州音潮州音）を附して、正月十一日印板出来す。同時に最勝王経一部十巻、和訓を片仮字附して、真言は梵字に書し、同要文和訓（折本三巻）ともに印板出来。陀羅尼の梵音は浄厳和尚、悉曇の筆執は

義潭比丘、陀羅尼の校合は幸間阿闍梨・堯善阿闍梨・堯甚阿闍梨、和訓の点は天泉和尚、正字の訂正は池永道雲・一嶺道先和尚・見性和尚、反相の図絵は黒川玄寿齋、筆者は古市軒一栄子等なり。

その後、享保十六年、最勝王経四朝（唐・宋・元・明蔵経）本、ならびに朝鮮本等数多検合して、真言は梵漢併べ書し、和訓に点を附し、一部十巻印刻せられける。しかのみならず、最勝王経一部始終の変相を三十八幅に彩画・表装せしむ。実に希有の勝業なり。

また『升庵行状記』（十二）の「金光明経開版次第の事」には、寂紫が三十八歳から、『最勝王経』の西大寺版・高野版・朝鮮版・唐版、および諸国の書写本等を集めて校合の上、その校異を頭書、本文には和訓・註釈を付して、聞法者の耳に通じ留まるテクストの作成をめざしたことが記されており、その営みが音読・訓点・唐音・正字・俗字等に関する個別の諸版の印刻に及んでいたことが左記の書により知られる。

○金光明最勝王経正字　一版
一部十巻三十一品字数六万三千七百十六字私別本ニ六万三千九百四十五字

○和訓　一版

○同唐音　一版
○ナンキン　○チャクチュウ　○ホクチウ　○ニッポン　四ケ国の音附

○同音読　一版

○三巻要文　和訓　一版

○同金経大縁起　一版

○同略縁起　一版

○同供養行軌　一版

○金経の大意　一版

○薬師本願功徳経　此経ト心経ハ金経ノ外ナリ
○般若心経　○唐音　○音読　○和訓共　三版

後方の「開版次第」の『金経の大意』までの九本が『最勝王経』関連の書上で、本文部と合わせ見ることにより、升庵が取り組んできた同経に関する様々な開版があった事実が浮かび上がる。前稿から注目する「正徳版経」に関する記述を、同版経の刊記に照らせば、正徳三年正月十一日に印板が成ったことをはじめとし、和訓に片仮名を付し、真言は梵字で書したこと、陀羅尼の梵音は浄厳和尚（覚彦）、和訓の点は天泉和尚（天仙）、反相の図絵は黒川玄寿齋であったことが一致し、さらに刊記に載らない悉曇の筆執は義潭比丘、陀羅尼の校合は幸間阿闍梨・堯善阿闍梨・堯甚阿闍梨、正字の訂正は池永道雲・一嶺道先和尚・見性和尚、筆者は古市軒一栄子等という情報を補うことができる。また同時に『要文和訓』（折本三巻）や、南京音・福州音・漳州音という中国江南地方の唐音を附した印刻があったことも知られる。これら開版に携わった人物を一覧するにおいても、また『升庵行状記』の記述の諸所に垣間見られる升庵の事業の実現を支えた経済的支援に関する記述の一端からも、それが一大プロジェクトであったことが看取され、その開版事業を像仏、医療などの様々な事蹟とともに歴史に位置づけて捉えることが可能となる。

加えて、この【抜書】より、「正徳版経」を遡る宝永五年（一七〇八）に開版された版経（以下「宝永版経」と記す）の存在が新たに判明されることの意義は深く、それが呉音に片仮名訓を付した版と、平仮名訓を付した版の二種の印刻であったことが知られる。刊記に挙がる印刻関係者が「正徳版経」と異なることや、平仮名版が女人のために印刻されたことなど、「人に施し読ましめること」を眼目とする升庵の試行が重ねられてきたことの証左といえる。これについては、井伊直治公から秋葉大権現へ奉献した御宝前品目に関して記した「宝永八年三月七日付目録（写）」の末尾に、「檀主 金光明最勝王経 広行流布之願主 直治寂紫子 金光明最勝王経 版木壱部」という記載が見いだされ[31]、「正徳版経」が宝永八年三月から五か月程後の正徳元年八月に所願が立てられていることから（宝永八年は四月二十五日に改元し

て正徳元年）、まずは先駆けて権現に「宝永版経」を一部奉納し、次なる「正徳版経」の所願を期したものとみられる。この宝永版とみられる『最勝王経』の御所蔵を、秋葉寺と同じ遠州の千葉山智満寺御住職からの御一報により承知することができた。思いがけない機縁を得、今後にその現存版経の詳細を調査研究により明かすことで、升庵の開版事業がその初期段階から鮮明に浮かび上がることは必定であろう。「正徳版経」に次ぐ秋葉蔵版の「宝暦版経」への影響の可能性なども考えられる。

また右のほか、升庵がほぼ時を併行し関連書の印刻にもあたっていたことは、宝永六年（一七〇九）八月廿六日に印板が出来たという『最勝王経縁起』一巻や『最勝王経勤要』一巻、『最勝王経供養儀軌』一巻（片仮字附一部 平仮字附一部）をもっても知られる。これらに該当すると思われる「開版次第」記載の『金経大縁起』や『金経之大意』の現存は未詳であるが、『略縁起』および『供養行軌』については、宝永六年から半世紀を経た宝暦十年（一七六〇）に秋葉蔵版が開版された翌十一年（一七六一）冬に、版元・売出を山崎金兵衛とする左記の出版が確認され[32]、版本の現存により本文の全容を明らかにすることができる[33]。

- 『最勝王経略縁起』全二冊、墨付五十二丁、吉永昌庵　＊「升」を「昌」とする
- 『最勝王経』折本十冊、吉永昌庵

一方、『金光明最勝王経和訓』に対して『金光明最勝王経唐音』（南京・漳州・福州・日本）、『金光明最勝王経音読』に対する要文の和訓などは現段階において現存を確認し得ない。なお、この「開版次第」の記述以外にも、升庵・升栄没後の開版として、華厳の学僧鳳潭（一六五四―一七三八）が「正徳版経」に校訂を加えた寛政二年（一七九〇）刊行の『金光明最勝王経』十巻（「正徳版経」の刊記をそのまま印記）が確認されるなど、升庵の版経が後世へ与えた影響として看過できない経書が散見されることを附記しておく。

ところで、『升庵行状記』【附録】「外伝」（附録三）の「恐れながら書付をもって願い奉り候ふ」という段に引用され

る弟子升栄が奉行所へ提出した書状は、升庵が『最勝王経』の開版に生涯を捧げた所以や、本文の対校に用いたであろう版経のことに記述が及ぶものとして多くの徴証を含む。升庵の開版になる経典が、如何にして印刻まで整えられていったのかという経緯を踏まえ、実際に該当する経典を披見し得ることは、経典研究において極めて有益なことであるといえよう。以下、記述に従い、事の次第を追ってみたい。

深川猿江裏町、家持高嶋升栄申し上げ候ふ。私へ相続申し付け候ふ師吉永升庵儀、隠医に罷り成り、仏経に心を入れ、一切経中に『金光明最勝王経』と申す十巻の御経を仏経無上の御経と見付け、この御経を常に信じ、八十歳まで五十余年、この経前にて密かに天下泰平・万民安穏の御祈禱、朝夕相勤め、末代この御経広行流布を願ふの志にて、別紙の通り、品々残し置き申し候ふ。

升庵申し候ふは、「この御経は諸宗とも通行の御経にて、天下泰平・万民安穏第一の御祈禱にて古へ日本にては、聖武皇帝・光明皇后・嵯峨天皇・光孝天皇・一条院・御冷泉院・白川院等、この御経尊敬、広大成る儀に御座候へども、肝要本経、書写本にて、御僧方の指南これ無くては俗に通ぜざるゆゑ、段々信心薄く罷り成り、御経も相残り申さず候ふ。尤も、黄檗山に一板、南都西大寺に二板、高野山に二板これ有る内、一板は紀州大樹南龍院様御開板仰せ付けられ候へども、皆本文ばかりにて俗に通ぜず。御僧方は一宗に荷はれざるゆえ、講師もこれ無く、いま天下の御祈禱にも行はれず、秘を借り候ふ儀は、この御経の尊貴余り候ふゆゑ。」と申し候ひて、升庵俗の形幸ひに末代流布の世話仕置き候ふ由にて、八十歳まで一生経意を正し、本文に和訓の仮名を付し、俗人も本文にて読み和らげ候ふやうに開版等仕ふまつり、金経一巻の品に心を尽くし、相残し申し候ふ。

ここに、「隠医」となって仏道に専心する時を得、一切経の中から義浄訳の『最勝王経』十巻を見いだし、八十歳まで五十余年の間、天下泰平・万民安穏の祈禱を朝夕に勤仕しながら同経の広行流布のために幾度も本文の校訂を行ったという、升庵の日々の営みが看取される。また、「黄檗山に一板、南都西大寺に二板、高野山に二板」という記述か

らは、当時、升庵が持経し、対校に用いたと思われる『最勝王経』の版本が明らかとなるところである。前稿において、「正徳版本」の本文が国宝西大寺本に一致する箇所が随所に見受けられ、明版に一致する傾向があることを指摘したが、升庵のいう「西大寺二板」のうちの一版がまさにこれに相当しよう。升庵が古訓を含む奈良時代の西大寺本の価値を深く理解するとともに、それを披見し得る立場にあったことは注目すべきことである。また、天和元年（一六八一）に鉄眼道光により黄檗版が完成したことは、当時「隠医」の道を選び、仏道への志を厚くした二十六歳の升庵にとって経典研究への大きな励みとなったであろう。

たとえば、そのうちの高野版についてここに一考するならば、「高野山に二板之内、一板は紀州大樹南龍院様御開板仰せ付けられ候へども」とあるのは、紀州南龍院、即ち初代紀伊藩主徳川頼宣公の開版にふれたものであると思われる。高野版の研究に研鑽を積まれた水原堯榮氏によれば、高野山における開版事業は、鎌倉時代の建長年間頃より起こったとされるが、その山上の開版の歴史の中に『最勝王経』を辿れば、寛永二十年（一六四三）十一月、高野山遍照光院の良恵が頼宣公の願経として、二百部の『金光明最勝王経』十軸の開版をなし、諸社寺へ奉納された版経があることが知られる。[34] それは紀州公（一六〇二―一六七一）の四十二歳の厄年にあたり、嘉齢万歳・武運長久・弓門繁栄を祈願し、併せて持経者である良恵自身の二世の安楽を祈ったもので、一行十七字詰の巻子本であった。

いま一版の高野版は、寛保三年（一七四三）四月、真言宗において日本最古の印版・活版は如何なるかと大岡越前守が江戸高野在番所に照会したのに対する答申の書状に、「此度、其ノ本ヲ差シ越ヘズ候フ」と、建長三年印刻の即身義を越えるものではないがと断りおいて、南北朝時代の延文年中（一三五六―一三六一）に印板された同経のことを挙げているのがこれに相当しようか。もとより刊記・識語などの記載無く、高野版であるかは不確定ながら、照会の答申書という筋からすれば、その可能性は高く、『升庵行状記』に記された「高野版二本」とは、寛永版とこの延文版のことかと推測されるところである。

「皆、本文ばかりにて俗に通ぜず」とは僧侶方は『最勝王経』が宗の所依の経典とならざるゆえに、これを講説する講師も無く、かつて宮中の御斎会で同経を講説し国家安穏を祈ったような法会もないことを憂い、かえって俗体の身であることを幸いに尊貴に満ちたこの経典が末の世までも流布するようにと、八十歳までの一生を経意を正すことに費やした経緯が知られる。本文には和訓の仮名を付して俗人でも読みやすいようにと開版を行い、一巻の品ごとに心を尽くして残したという、升庵のめざした開版が如何なるものであったかを伝える文面である。経旨の尊さに比して寺方が経を流通する傾向にないとの言は、同経の受容史を見定めての升庵の慨嘆が弟子升栄の「書付」を通して今に甦るかのごとくで、正徳版経の刊記に掲げられた「広行流布」の精神と相呼応する。

ところで、そうした升庵の開版に対する飽くことのなき執心は、「希有の勝業」(『升庵行状記』)と升栄が称したことば通り、右の宝永版、正徳版と版を重ねた後も、留まって満足するに至らず、さらなる諸本の蒐集と校訂作業が継続されていたことが「大清人十筆金光明最勝王経の事」(十四)の段からうかがわれる。

享保年中の頃、寂紫志願により大清へ頼み遣はし、金経全部十巻書写を求む。広行の志を感じて十人十巻の別筆を書し、成就し来る。誠に弘通の根本の経にて、日本の宝なるものか。今は、升庵居跡の猿江宝輪山大泉寺覚樹王院に附属す。

一、第一巻　　一、第六巻

○大清康熙五十七年歳次戊戌十月穀旦　　浙江湖州府皈安縣　費奏工

江南蘇州府呉縣　陳言伝　　年二十七歳　薫休敬書

年七十二歳　薫休敬書　　朱印

朱印

一、第二巻　　一、第七巻

浙江湖州府帰安縣　朱謨
年三十歳　薫休敬書
朱印

一、第三巻
浙江湖州府長興縣　蔣瑛
年二十歳　薫休敬書
朱印

一、第四巻
浙江湖州府長興縣　王三錫
年十八歳　薫休敬書
朱印

一、第五巻
浙江杭州府仁和縣　趙牧
年十八歳　薫休敬書
朱印

浙江湖州府皈安縣　費麟
年二十四歳　薫休敬書
朱印

一、第八巻
浙江湖州府烏程県　孫勳
年四十歳　薫休敬書
朱印

一、第九巻
浙江杭州府銭塘県　徐淮
年二十三歳　薫休敬書
朱印

一、第十巻
浙江湖州府徳清県　孫端
年二十歳　薫休敬書
朱印

右一部十巻三十一品全也

右、第一巻の「大清康熙五十七年歳次戊戌十月穀旦」という識語から、本朝における享保三年（一七一八）のことと して、清国へ依頼した『最勝王経』十巻（三十一品）の書写が清国の十人の僧侶等によって成就し、升庵のもとへ請来されたことが見てとれる。十巻すべてにおいて、書写僧の在所と僧および年齢が明記された署名・捺印入りの「目

録」を「升栄記」が記録したものとみられ、冒頭巻の「江南蘇州府呉縣 陳言伝 年七十二歳」の長老を筆頭に、江南は銭塘江（浙江）左岸の「浙西」の蘇州・湖州・杭州といった太湖周辺域の僧等の書写本を蒐集するものである。それは書写行の功徳に会するものであるとともに、校合のための本文の入手をめざして依頼した書写行であったことは明らかで、「正徳版経」開版後の六十三歳にしてなお、諸本校合による本文の校訂が継続されていたことがここに知られよう。この清国からの写経請来が、清朝において雍正から乾隆年間にかけて行われた清蔵（「龍蔵」「乾隆蔵」とも）の開版（雍正十三年（一七三五）を控えた直前の時期にあたることが注目される。それは元禄年間に五代将軍徳川綱吉の常憲院廟内に請来・所蔵された嘉興蔵（径山寺蔵）[38]に次ぐ康熙年間に確認し得る本文を、磧砂蔵・前思渓蔵・後思渓蔵・普寧寺蔵といった一切経開版の歴史を負った浙西の地に捜索し、一切経諸版間における個別経典の本文を書写本として請来するものであった。そうした企図を実現し得る人脈を升庵が内外に備えていたことを示す事例でもあり、当代の清国との交流の一例としても、また『最勝王経』の受容史においても刻すべき記録であるといえよう。

六、『金光明最勝王経』曼荼羅の造立および開帳

前節に引用した『升庵行状記』【附録】「外伝」（附録三）の後段には、師升庵の深い志を汲んだ升栄が、師の没後に正徳版の唱導に用いられた「金光明最勝王経曼荼羅」等の開帳を、まず奉行所石河土佐守へ願い出、次いで寺社奉行所へ願い出た二通の文書が収録されている。そのうちの奉行所宛文書を引用すれば次のごとくである（寺社奉行宛は略）。

然るところ、私儀、右師匠の志を相達したく、このたび恐れながら願ひ上げ奉り候は、本所一ツ目高野寺大徳院地内におひて右曼荼羅相開き、世上へ升庵一生信切の志を弘く吹聴したく存じ奉り候ふ。かつまたこの助力をもって『金光明最勝王経』和訓の板摺り立て、御経一部づつ、御公儀様、御当地所々の御祈願所へ納経仕度く存じ奉り候ふ。もちろんこれを望むもの御座候はば、摺り立て流布したく存じ奉り候ふ。助力相残り候はば、右の品々

入れ置き候ふ風入の土蔵相建て、右の品、火災これ無きやうしたく存じ奉り候ふ。恐れながら、御慈悲をもって、右の蔓荼羅・弁才天・吉祥天開見、経板摺り立つるの儀、御免遊ばされ下し置かれ候ふやう、願ひ上げ奉り候ふ。尤も当七月十六日より日数晴天五十日の内、右場所にて御免仰せ付けられ、下し置かれ候へば、有り難く存じ奉り候ふ。以上

元文三壬年六月九日　　深川猿江裏町家持　高嶋升栄

御奉行所様

右の元文三年（一七三八）は升庵の三回忌にあたることから、升栄は師の供養のために、深川本所一ツ目の大徳院を道場に曼荼羅の開帳を願い出、同時に、『最勝王経』の和訓版を摺り、御公儀（将軍家）や所々の御祈願所への納経を申し出たことが知られる。また加えて、

開帳

一、此度、御免蒙る吉永升庵造立之金光明最勝王経蔓荼羅　三十八幅

佛誕生蔓荼羅　二幅

諸経結集蔓荼羅　涅槃会蔓荼羅

舎梨分配蔓荼羅　都合四十三幅

一幅の大きさ横九尺　竪三間余

一、弁財天　　一、大黒天

一、吉祥天　并升庵木像

右、本所一ツ目大徳院地内において、来八月十日より十月十日迄開帳せしむるものなり。

元文三午年七月　　月光山正福寺

右開帳に家場仕様注文書等これありといへどもこれを略す。

という開帳の次第を提示している。前稿で「正徳版経」の各品の経題下に記された曼荼羅に関する記載について、三十一品の一品ごとに当てられた曼荼羅の幅数の全貌を挙げ、各品の説法に曼荼羅が掲げられたであろう唱導の場を推定したが、その実態となる開帳が現実にあったことが右に確認される。当初は、現存する曼荼羅を確認し得ないため、それが「宝塔曼荼羅」である可能性について僅かにふれおくのみに留まったが、左記のごとく、『升庵行状記』の（十一）「金光明大蔓荼羅の事」に、曼荼羅の制作に至る事の次第を明かす記述が見いだされ、それが「正徳版経」の内部徴証と見事な一致をみるに至った。

寂紫、『金経』画図蔓荼羅製すること、蓋しゆへあり。奥州三代将軍藤原秀衡諸経寄附の寺、光堂に宝物十幅の槃画あり。横弐尺、竪長さ四尺有余なり。正中に『金経』を書写し、傍らに法図を画けり。寂紫これを拝して頻りに思ふに、「我、かねて願ふところあるにかなへり。然りといへども、この十幅は略画にして本と仕ひがたし。我、また一々画し、こと〳〵く書して、末代の見縁のために『金経』荘厳に備ゑんことを思ふなり。」と。

遂に『金経』全部六尺五寸四方に、滑紙を越前の太守へ希ひ奉り獲て、左右旁金泥もって『金経』の本文を書し、六尺四方の内、法相を画き、養卜・探信、そのほか諸家の画工来たりて、説に徇ひ、筆を労し、彩色細金にして七宝を蒔き、或は一幅にして一品、或は二品合して一幅となし、或は二幅・三幅をなし、全部合して三十八幅となすなり。これ『金経』の大蔓荼羅なり。寂紫歳四十頃より五十八歳までに漸く成就するなり。

また別に六幅製す。これ『金経』の説にあらず。諸説を採り、先哲いまだ画かざることを画し、彩色美麗を尽くし、ここに佛世界の思ひを生ず。こと〳〵く左に目録に題し、これを挙ぐるなり。

高嶋升栄

○金経全部大蔓荼羅　三十八幅
○佛誕生大蔓荼羅　上下二幅
○涅槃会大蔓荼羅　一幅
○舎利分配大蔓荼羅　一幅
○諸経結集大蔓荼羅　一幅
○盂蘭盆会大蔓荼羅　一幅

右四十四幅四十三幅は、寂紫居跡の覚樹王院へ附属す。盂蘭盆会大蔓荼羅一幅は、辨才天とともに武州駒込の大智山海蔵禅寺に附属す土物店手前、俗にうなぎなわてと云ふ所。

注目すべきは、奥州の中尊寺大長寿院の宝物で藤原秀衡の御願と伝えられる「金光明最勝王経宝塔曼荼羅」十幅（国宝）[36]を披見して感慨を得た升庵が、三十一品を十幅に収めたそれが略画であるとして、経内字数を満たす宝塔曼荼羅制作の誓願を立てて着手したということである。六尺四方（およそ二メートル）の紺紙を越前の領主から取り寄せ、三十八幅の左右に経文の一文字一文字を金泥で書し、中央には法相画（経意絵）を狩野派の絵師養朴・探信に依頼して描かせたと記されていることである。「彩色細金にして七宝を蒔き」とあるから、その荘厳の豪華絢爛は想像を絶するものであったろう。「正徳版経」の品ごとの末尾に経内字数が詳細に示されているのは、こうした「一一の文字」をもって宝塔曼荼羅の造形に沁み渡らせる思想に裏打ちされるものであったと知られる。

四十歳の頃より五十八歳までの歳月を費やしたというのは、厄年や還暦を意識してのことと推察されるが、おそらく中尊寺曼荼羅披見の機は、「隠医」となって諸国行脚に出ていた三十歳前後に那須の雲巌寺で一切経を閲覧したという奥州路でのことであったかと想像される。そうした升庵の飽くなき執心は、没後の代々的な開帳へと継承されることになる。『升庵行状記』【附録】（附録三冒頭）に見いだされる次の附記には、

吉永升庵門人高嶋升栄、師升庵寂紫没後四年目、元文三年、本所大徳院において大蔓荼羅・佛座石等開帳願ひ候ふ下書。

とあって、升庵没後のこととして、「金光明最勝王経宝塔曼荼羅」の開帳の実現が弟子の升栄によって果たされたことが記し留められているのであった。

七、『金光明最勝王経』および「金光明最勝王経宝塔曼荼羅」の行方

師升庵亡き後、その遺志を世に少しでも還元すべく、弟子升栄が奉行所に願い出た「金光明最勝王経宝塔曼荼羅」の開帳は、当代の多くの人々に何らかの言い伝えを与えたであろうことは想像にかたくない。その一端を汲み取ることのできる記録が、江戸後期の随筆によって知られる。和漢の学に通じた歌人津村正恭（淙庵）の著した『譚海』に、「升庵伝」と思われる逸話が二箇所にわたって見いだされる。[37]

一つは、『譚海』巻之十一の「吉永昌安弁財天問答事」という条に「吉永昌庵といふ医師、深く弁財天に帰依し、信心無双の人」という書き出しで始まる記述で、最勝王経の図を曼荼羅に描くことを発願し、狩野梅春という絵師に描かせたとあり、五十幅で二万二千両の金子を費やして成就したということが記されている。これらの曼荼羅は有徳院、即ち徳川吉宗（一七一六―四五在職）の上覧あって、「本朝無双の曼荼羅」との上意を得たといい、後にこの曼荼羅を覚樹王院権僧正へ寄附し、僧正の本所猿江の隠居へ納置され、天明六年の同寺の回禄により焼亡したことが知られる。同話の末尾には「重出小異」という割書きが示されており、『譚海』巻之一の「官医池永昌安弁財天信仰の事」という条がそれに相当するもう一つの逸話であろう。そこには最勝王経の所説を悉く曼荼羅にして、狩野探信に描かせたとあるが、次話の「覚樹王院権力僧正の事」の僧正の遺物悉く焼亡という記述に「其折右最勝王経のまんだらも焼卻しぬ、惜むべき事なり」とあることから、関連の逸話であることが認められる。曼荼羅を描いた絵師の名が狩野梅春と

探信とに分かたれるがいずれも狩野派の絵師で、双方の逸話に夢中示現の弁才天と問答して秘訣を受け、覚醒後に筆記した一巻を青山の出泉寺に秘蔵したことや、宇賀神説によらず最勝王経説により弁才天像を造立したという共通の弁才天説話があり、これに添えて最勝王経曼荼羅の発願と焼亡のことが記されていることなどから、吉永昌安と池永昌安と表記に異同はあるものの、吉永升庵の「升庵伝」とみてよいであろう。安永年間（一七七二―一七八一）頃、著者正恭が見聞したことを広く雑纂的に記載した随筆集に、曼荼羅にまつわる「升庵伝」が収載され、その没後にも升庵が成した事蹟が話題性をもって語り継がれていたことが知られる。

ところで、八代将軍吉宗の上覧を得て、「本朝無双の大曼荼羅」と言わしめた曼荼羅が伝来したとされる覚樹王院について、『升庵行状記』【附録】「外伝」附録二の「寂紫居跡を升栄、覚樹王院へ譲り候ふ事」は、次のように記している。

ここに猿江寂紫居跡に升栄住居すといへども、寂紫生涯無妻独身にて、『金経』流布広行の心労斜めならず。何とぞこの地一院に建立せんことを願ひ、神田明神前に以成院とて叡山の万行者知識あり。この尊師ならでは我が願ひ成就ならめと、しきりにこの尊師に願ひしかば（中略）万行者「霊地なり」と賞して、公へ願ひなりて、今、改めて寶輪山大泉寺覚樹王院と号す。　御朱印寺、御祈願所となり、正月十五日独御礼法燈信盛んに並びなき一院とはなれり。五百羅漢道扇橋通り四ツ目の横川通りつゞきなり。参詣し拝したまふべし。（中略）

一、去りし天明六丙午の年正月廿六日、湯嶋台より出火、さかい町辺まで、同日、小梅より出火。すな村八右衛門新田まで類焼。その砌、覚樹王院も類焼。この時、寂紫造立の経疏多く焼失す。升栄も甚だ歎きしと、物語なり。

右により、天明六年（一七八六）の湯嶋台からの出火で、覚樹王院も類焼したことが知られるが、同院については、『寺社書上深川寺社書上 十二』の「地誌御取調書上帳 深川覚樹王院」にも記録が残り、その中に吉永升庵に関する記載も多

く確認される。[38]

往古は武州葛飾郡深川本村地内、猿江と号す入会の場所にて、医師吉永升庵寂紫と申す者所持の宅地にて、千三百四拾五坪の地所にこれあり候ふところ、元文年中、右、この所譲り請け（吉永升庵享保二十年卯年三月十七日命終致し候ふ間、右地面請け取り候ふ儀、元文元年か二年頃にこれあるべく候へども、書留これ無く候ふ間、年月相知申さず候ふ）

右の書上によれば、覚樹王院は東叡山輪王寺宮御直末の深川の御祈願所で、正式には「法輪山意成院大泉寺 天台宗 定院室 覚樹王院」と称するが、もとは医師である吉永升庵寂紫が所持した千三百四十五坪の宅地を譲り受けたことが明記されている。さらにこの書上からは、深川猿江（現・江東区猿江）への転居について、先の『升庵一代記』を裏付ける記録も拾え、余命を意識した升庵が、自身の所持する仏像や経巻、曼荼羅などが没後に散逸することを愁い、神田明神前の成就院にいた叡山の万行者である玄照なる僧侶に、その一切を託す経緯を具に汲み取ることができる。

元文の末の頃、玄照、谷中より深川猿江へ移る。この所は、これより先に吉永升庵寂紫と云へる医師ここに住みけるが、寂紫居士もとより深く仏法に帰依し、ある時、江嶋　弁才天へ詣でて海中に二百日の苦行をなせしより、しばしば天女の冥助を蒙り、施薬の効験神のごとく、よろず意に叶ひ、仏像・経巻自ら作り、また他をしてなさしめ、作る所の仏像・経籍等勝計しがたし。その中、『金光明経』の曼荼羅四十余幅、誠に彩色美を尽くし、拝する者、「皆、希代の珍宝なりと称せり。」と。居士また仏法修行の偉人なり。

この寂紫、一日、玄照に見みへて古今の事どもを物語り侍りけるが、頻りに照に帰依して申しけるは、「某、老衰して余命無し。余が造りし曼荼羅・経巻等、没後には如何かならんも測りがたし。これを護持して後々までも伝へ給はん人は、師のほかは覚へ無し。わが没後には必ず地面とともに請け取りて、末の世までも退転無く、わが未来の妄執をはらし得させ給へ」と、懇ろに希ひければ、玄照この旨を貫主の宮へ申し上げるに、宮の仰せに「数多の仏像・経巻散失せん事、憂き事なるべし。寂紫が望みに任すべし」との御事ゆゑ領掌し、程なく寂紫身罷

りしかば、弟子の高嶋升栄より上件の曼荼羅・地図等引き渡しぬ。それよりこの地へ移り求聞持堂を建て、行法し、種々の秘法ども修しける。

右のごとく、深川猿江の覚樹王院の求聞持堂へと移された版経・曼荼羅等、清国から請来した同経の写経などであったが、天明六年の同院の焼亡とともに灰燼に帰したことは惜しまれる。こうした経緯を辿れば、その摺り版のうちの一揃えが、開版元である湯島の霊雲寺との関わりから、金剛院所蔵というかたちで現存されていることは稀代のことであり、影印・翻刻による本文の紹介の意義をあらためて確認するところである。

むすびにかえて　医道と仏道と

江戸時代、正徳年間に開版された新出の『最勝王経』を追う過程で、江島弁才天信仰に関する資料から、はからずも開版を行った吉永升庵という蘭方医の存在が浮かび上がり、『升庵行状記』を中心に「升庵伝」を検討に入れて多くの知見を得た。それは開版に至る経緯を外部・内部にわたる多くの徴証をもって辿ることのできる経典として、意義を呈するものである。日本国内のみならず、朝鮮半島や中国の諸本にも意識を行き渡らせ、さらに義浄が見出した梵本（サンスクリット）をも視座に入れて広くアジアを見据えた経文の研究という、経典研究本来のあるべき姿を江戸期に成した一つの業績といえる。鎖国下においても自在に思考を廻らすことができたのは、升庵が蘭医という境遇にあったことと、なおそこに固執することなく世と人とを見つめ続けたこと、そして本稿では紙幅の関係で具体的な論述に及べなかった開版や造像の実現を支える経済的援助によろう。その底流には、常に弁才天信仰があった。

そうした「正徳版経」が刊行された正徳三年といえば、貝原益軒がその晩年（八十四歳）に医学的教訓の書である『養生訓』を著した象徴的な年にあたる。疾病治療に用いる薬物（動植物・鉱物）の研究に発する本草学と医学の盛行（同時に頽廃もあった）を背景に、精神と肉体の両面からの健康法が提示された時代であった。父寂翁が稲葉正則を介し

て御殿医への道もありながら、治療の裾野を広げることに医師としての志をもっていたことは、明らかに升庵寂紫が「隠医」の身を貫こうとした精神に培われていたと認められる。

升庵と『最勝王経』との縁について『升庵行状記』は、母胎に金の光明が入り懐妊したという、いわゆる聖人生誕の体裁をもって語り出される。江島の弁才天信仰にまつわる一代記という性格上、霊験譚的な伝承が随所に見受けられ、同経との深まりは「金光明」という経題に関わる「夢見金鼓懺悔品」の説話に准えた海中での「金光明陀羅尼」の読誦が契機であったとする。無論、そうした宗教的体験が重なるなかで、同経への造詣が次第に深まっていったであろうことに相違ないが、升庵が医道に携わる家に育った環境を鑑みるならば、同経内の医学に関わる「除病品」の医術を行う流水長者父子の話や「弁才天品」の香薬三十二頌のことなどが想起される。義浄の『南海寄帰内法伝』には、生命の学問として体系化されたインド医学、八分科（大外科医学・小外科医学・身体病気治療・鬼神病学・小児医学・毒物学・仙薬学・強精剤学）という「八医」の大要が記されており、経典自体に古代印度の医学（アーユルヴェーダ Ayurveda）に関わる側面が内包されている点にも、同経に傾倒する一因が少なからずあったであろう。[39] さらに漢訳には「医は仁術なり」という中国における思想が反映していたことを思い合わせれば、医師としての升庵という側面から、『最勝王経』への傾倒について、さらに一考すべき点が残されていよう。[40]

『升庵行状記』の序に弟子升栄が手向けた「医は肉病を治し、仏は心痾を治す」ということばは、師升庵自身が常に口に上せていたことばであったものと思われる。『法華経』や『仁王経』とともに、護国三部経をなした『金光明最勝王経』の説く「現世安穏」と「懺悔」思想により、心の素地を為すことを広く世に流布すべく、升庵は医学のみでは解決し得ない根本原因の治癒への一助として経典を訓みくだし、日本語という自国のことばをもって理解を促すという、唱導の場の構築をめざしたのであった。正徳版の『最勝王経』は、江戸時代に生きた吉永升庵というある蘭方医が、経典流布に対する指針と精魂を込めて遺した訓読経典の結晶であり、あらためてその偉業と意義をここに確認し

記しておきたい。

注

(1)『続日本紀』聖武天皇 神亀二年秋七月戊戌条に七道諸国に対し、旧訳の四巻本（曇讖訳『金光明経』）と八巻本（釈宝貴等合糅『合部金光明経』）が無き場合は、新訳を転じて国家平安ならしめよとの詔が示される。

(2) 藤谷厚生氏「金光明経の教学史的展開について」（『四天王寺国際仏教大学紀要』第四号、二〇〇四年）に詳細な教学史が示される。

(3)『鶴見大学仏教文化研究所紀要』第二六号（二〇二一年）所収。小稿は本研究所の令和二年度秋季ワークショップの企画によるもので、報告・執筆の経緯については、同紀要のワークショップ記録「護国経典『金光明最勝王経』版本をめぐる信仰と受容のあり方――大本山總持寺祖院所蔵版本の披見にちなんで――」、および拙稿の注1、6に認めている。

(4) 高野山真言宗別格本山、東京八王子上野町。金剛院仏教文化研究所における所蔵聖教の整理・目録作成・寺史編纂に当たる中で披見。

(5) 是澤恭三氏『江島弁財天信仰史』「諸大名と吉永升庵」（『東京史談』二十三-一、一九五五年初出、江島神社社務所より一九六五年前後刊行、二〇一九年復刊）。鈴木良明氏「吉永升庵の弁才天信仰」（『江島詣――弁財天信仰のかたち』有隣堂、二〇一九年）。江島の信仰史を考究する史学研究の成果から一部の記録が紹介されている。

(6) 藤沢市文書館学芸員、鎌田文子氏「「吉永升庵一代行状記　完」解題」（『藤沢市文書館紀要』第十六号、一九九三年三月）に翻刻紹介され、解題が付された。

(7) 前掲注1の是沢恭三氏、鈴木良明氏、前掲注6の鎌田文子氏の論稿に既述あり。

(8) 岩本院旧蔵。現在は藤沢市文書館の所蔵。「一代行状略記」という記述の上に、「吉永升庵／江嶋弁才／天女霊験」と三行の割書きが冠せられて書名をなす。国会図書館所蔵『誠唸社漫録吉永升庵傳　完』(内題「吉永升庵江嶋辨才天霊験一代行状略記」)は、安政二年(一八五五)の書写本である。東京国立博物館所蔵本については現時点において調査・披見に至っておらず、今後の課題としたい。

(9) 正林光澄著『弁財天諸説要略集』上、宝暦七年丁丑之歳八月、東都西窪(国立国会図書館蔵)。

(10)『江の島岩本院の近世文古文書』(藤沢市教育委員会編集発行、二〇〇三年)、同書の翻刻は岩本院文書研究会。

(11) 真福寺と西の窪については『増補改正芝口南西久保愛宕下之図』(万延二年)、仏乗院については『芝三田二本榎高輪辺絵図』(安政四年)を参照。

(12) 圭室文雄氏「江の島弁財天信仰と別当岩本院」(『藤沢史研究』三八、二〇〇五年)。

(13)『升庵行状記』閲覧にあたり、藤沢市文書館のお取り計らいのもと、原本を披見、書誌および一字ごとの確認を行った。ここに謝意を表する。

(14) 肥後菊池氏(『姓氏家系大辞典』角川書店、一九六三年)。肥後国菊池二郎入道寂阿。菊池隆盛次子、武時。兄時隆に養われ菊池氏を継ぐ。『太平記』巻十一「菊池入道寂阿打死の事」、『博多日記』。

(15)『長崎市史』地誌編・仏寺編上(長崎市、一九二三年)。

(16) 小池猪一氏「東洋医術の勃興」(『図説日本の〝医〟の歴史』上通史編、大空社、一九九三年)に徳川綱吉の医師の中に名が挙がる。

(17) ヴォルフガング・ミヒェル氏「日本におけるカスパル・シャムベルゲルの活動について」(『日本医師学雑誌』第四十一巻第一号、一九九五年初出、後に「慶安三、四年の日本における出島商館医シャムベルゲルの活動及び初期カスパル流外科について」(『言語文化叢書 Languages and Cultures Series XVIII』九州大学大学院言語文化研究院、二〇〇八

年)。『加須波留秘方並諸家方』「吉永升庵相州稲葉美濃守殿御抱江戸に在り、子吉永升雪、阿蘭陀に付て筑前に下向す」(成田図書館蔵、＊原漢文、「雪」は「雲」か)。

(18)『神奈川県史』通史編二・近世一(神奈川県県民部県史編集室編、一九八一年)。

(19)巻一–十二、六冊。『日本医学史』を著した富士川游氏旧蔵、現在は京都大学附属図書館、富士川文庫所蔵。ヴォルフガング・ミヒェル氏「九州大学蔵の「阿蘭陀伝外科類方」(「阿蘭陀外科正伝」)と向井元升について」(『比較社会文化』第二巻、一九九六年)、同氏「初期紅毛流外科と儒医向井元升について」(『日本医師学雑誌』第五十六巻第三号、二〇一〇年)に『阿蘭陀外科正伝』に「阿留麻奴須ノ曰ク」とあるとの指摘がある。

(20)一巻。富士川游氏旧蔵。現在は京都大学附属図書館、富士川文庫蔵。防長両国大主綱広公幕下武士本名山名源七尉利之宛。

(21)ヘルマヌス・カッツ、Hermanus Katz、またアルマンス・カアツとも。綴りについてはArmanus、Allmanns Katz、Hermann Katz、Halmanns Katz、音写名については阿留曼須、安留曼寸などの表記がある。父寂翁升庵については夙に関場不二彦氏『西医学東漸史話』巻上「吉永升庵及升雲父子　阿蘭陀外科正傳、軍事外科を説ける第一人者」(吐鳳堂書店、一九三三年)があり、『当流伝記要撮抜書』の血脈部の翻刻がなされるなど、富士川游氏蔵本による研究の成果とされる詳細な研究があることにふれ得た。但し、「其一生涯は不明、第一其生活年代、其棲住地が今日に示されてゐない…巻軸の條下に述ぶる通りで延寶九年を中心とすべき推測より他に無いのである」とされた。また升庵の名は中野操氏(『皇國醫事大年表』南江堂、一九四二年、後に『増補日本医事大年表』思文閣、一九七二年)により医学史に刻まれている。医学史の中で父子の別が不分明に捉えられている場合もあるが、分野を越えた「升庵伝」という伝記資料を加えみることで、医名としての「升庵」が寂翁から息へと継承された名であったことを明らかにし得る。本稿では、父子の別を要する時は、「升庵寂

翁」「升庵寂紫」と記した。鶴見大学図書館の医学の蔵書に多く導かれた。

(22) 古賀十二郎氏『西洋医術伝来史』(形成社、一九七二年)にヘルマヌスに師事した者として河口良庵(『阿蘭陀外寮集』巻六、一六二九―一六八七)や嵐山甫安(『審国治方類聚的伝』緒言、一六三三―一六九三)、岩治勇一氏「和蘭陀外科免状(題簽)――アルマンス流阿蘭陀外科之濫觴――」(『日本医史学雑誌』第三十四巻第二号、一九八八年)に吉永父子に並び田村升意寂貞子、小池猪一氏「西洋医術伝来の時代」(前掲注16)にヘルマヌスに学んだ医術を『阿蘭陀流十八方膏薬』として著した奥医師瀬尾昌琢(一六四五―一七一八)の名が拾える。

(23)『三越先生腹診傳』一冊(根本昌庵虞齋記)。京都大学附属図書館、富士川文庫所蔵。平成二十八年(二〇一六)、国文学研究資料館「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」により電子化される。三越は江戸の医講堂で腹診を公開したとされる。

(24) 服部敏良氏『江戸時代医学史の研究』(吉川弘文館、一九七八年)。

(25)『彦根市史』上冊第四編・第三章・第二節 末松豊氏「藩政」(彦根市役所、一九六〇年)、中冊第四編・第六章・第四節 渡辺守順氏「宗教」(彦根市役所発行、一九六二年)。

(26) 服部敏良氏「江戸幕府の医官について」に示された付表Ⅱ「江戸幕府の医官譜」(前掲注24書)参照。正徳元年六月二日「井伊掃部頭直該病により龍眼肉一匣下さる」、正徳三年八月九日「外科医栗崎道有は井伊掃部頭直該病に従い浴場にまかるべしと命ぜられる」、同十七日「数原通玄は井伊掃部頭が浴場の地にまかるべき暇給う」の事象が見られる。

(27) 前掲注3。

(28)『正一位秋葉山大権現略縁起』の成立は、安永六年(一七七七)。東北大学付属図書館狩野文庫蔵。

(29) 能登の總持寺祖院の「秋葉蔵版」の所蔵は禅宗寺院間の関係によるとしつつも、伝来に至る思想的背景を前

稿執筆時には思い至らなかったが、令和六年（二〇二四）開山瑩山紹瑾禅師の七〇〇回大遠忌を迎えるにあたり、あらためて寺院史を振り返る過程で、禅師が晩年、北陸の羽咋に開いた永光寺の仏殿が「最勝殿」と称することにふれ得た。元亨元年（一三二一）、瑩山禅師は『最勝王経』の重要性を深く認識し、宝冠釈迦如来を本尊に、左方に観音、右方に虚空蔵の二菩薩を脇侍とする東大寺大仏殿に等しい三尊像を安置する仏殿を造立し（『洞谷記』）、「最勝王会を模す祝釐なり」と称したと伝えられる（「御開山及四哲行状略記」）。そうした開山禅師以来の『最勝王経』に対する意義付けが自然に継承されつつある寺院圏内で、研究の始発となった「秋葉蔵版」が祖院の庫内に収められたということになろう。もう一つの経緯として記し置く。拙稿「聖教を披き、宝蔵を思い描く」（『書物學 鶴見大学貴重書』勉誠出版、二〇二四年）。本稿校正中の本年令和六年元日、能登を震源とする能登半島地震により（最大震度七）、祖院の堂塔が損壊を受けた。今は人命の救済が専一たる時であるが、在りし日の宝蔵とともに当該版本も被災しており、そのほかの多くの文化財とともに救出の任にあたることができればと願う。

(30) 武井慎悟氏「秋葉蔵版『金光明最勝王経』――近世秋葉信仰と總持寺――」（『鶴見大学仏教文化研究所紀要』第二十六号、二〇二一年）所収。

(31) 「明治二十二年寺院明細帳（秋葉寺由緒）」収載（『春野町史』史料篇三、第三章「文化」第一節「寺社」、四〇一、春野町史編さん委員会編、一九九九年）所収。当該文書について武井慎悟氏より教示を得た。文書内（傍線部）、「版木」は「版本」か。

(32) 朝倉治彦・大和博幸氏編『享保以後 江戸出版目録』（臨川書店、一九九三年）。『略縁起』全二冊とあるのは、片仮名字附と平仮字附の二冊、或いは合冊されて刊行されることもあった『供養行軌』との二冊か、未詳。

(33) 前掲注3に記載のワークショップに臨み、『金光明最勝王經畧縁起供養行軌』寛政二年（一七九〇）の摺版を

研究所の所蔵とした。その後も引き続き、武井特任研究員とともに関連版本の蒐集を行い、鶴見大学仏教文化研究所蔵本としている。そのうちの薬師寺版は、南都における最勝王講復興との関わりによる刊行として注目し得る。「行願梵文鳳潭校正」と記される鳳潭の金光十巻などとともに、拾遺報告ができればと思う。

(34) 水原堯榮氏『高野板之研究』(初出は弘文社、一九三一年、復刻版は『水原堯榮栄著作選集』第二巻、中川善教編、同朋舎、一九七八年)の研究による。寛永二十年版『最勝王経』第十巻末の刊記の翻刻紹介があり、宋版の覆刻とみられるとされる。ほかに同書に引かれた『永寧坊所蔵刊布書目録』内に「金光明最勝王経」が挙がり、民間印刷業取次の永寧坊(学侶方直轄封禄付書林、山上小田原塗橋畔)の所蔵に同経の存在が確認される。

(35) 後に八代将軍吉宗の享保の改革で那須黒羽の大雄寺に施与・現蔵の四千五百巻。康熙年の版を含む。升庵ゆかりの長崎の延命寺も嘉興蔵の購入を行っている。大蔵会編『大蔵経――成立と変遷』(百華苑、一九六四年)、野沢佳美氏『印刷漢文大蔵経の歴史――中国・高麗篇――』(立正大学情報メディアセンター、二〇一五年)、宮崎展昌氏『大蔵経の歴史――成り立ちと伝承――』(方丈堂出版、二〇一九年)参照。

(36) 宮次男氏「金光明最勝王経金字宝塔曼荼羅図私見」(『仏教美術』七二、一九六九年)。林温氏「大長寿院蔵金光明最勝王経金字宝塔曼荼羅図覚え書き」(『仏教芸術』二七七「特集 中尊寺美術研究の現在」、二〇〇四年)。『平泉みちのくの浄土』特別展図録、NHK仙台放送局・NHKプラネット東北編集・発行、二〇〇八・二〇〇九年)に当該曼荼羅十幀の掲載(カラー)、有賀祥隆氏「平泉仏教文化の諸相と特質――奥州藤原氏三代の仏事を中心として――」(同図録所収)。

(37) 『譚海』(国書刊行会、大正六年)。寛政七(一七九五)の自序あり、十五巻。公家・武家の逸事から政治、文学、名所、地誌、物産、社寺、天災、医学、珍物、衣服、諸道具、民俗、怪異など広範囲に及び、雑纂的随筆集。

(38) 国立国会図書館蔵本より翻刻、私に校訂して引用した。引用は土地譲渡に関することに限ったが、升庵に長

崎を介して中国との往来があったことなど興味深い記事が散見する。

(39) 宮林昭彦氏「義浄の戒立観」(『大乗仏教から密教へ』勝又俊教博士古稀記念論集、春秋社、一九八一年)。杉田暉道氏『南海寄帰内法伝』にみられる臨床医学的事項について」Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ(『横浜医学』一六・一七、横浜市立大学、一九六五・一九六六年)。同氏「摩訶僧祇律にみられる医学」(『横浜医学』一八、横浜市立大学、一九六七年)。奈倉道隆氏「仏教とアーユルヴェーダ」。

(40) 壬生台舜氏『金光明経』(佛典講座一三、大蔵出版、一九八七年)。

謝辞

前稿を経て、吉永升庵の願意が籠められた開版の事実を新たに知り得た頃、天台宗千葉山智満寺御住職 北川教裕師より(静岡県島田市)、宝永版とみられる版経の御所蔵と、高嶋直治寂紫子の御位牌が納められているとの 御教導賜り、機縁に覚悟の思いを新たにした。ここに深謝申し上げます。疫禍が明けた暁に調査を請い願い、御寺と最勝王経の真相が繙かれんことを心より期して精進を重ねたいと思います。

【吉永升庵（寂紫）略年譜】　※諸伝により若干の相異があるが、年齢については数え年にて表記した。

明暦二年（一六五六）十月六日　一歳　長崎（肥前国唐船の集津）にて誕生、幼名金太夫。

＊万治三年―寛文二年　父、寂翁、阿蘭陀紅毛流外科のアルマヌスカツに師事、外科（膏薬療法・膏油製法）の伝授を受ける。

寛文四年（一六六四）四月　九歳　父寂翁に伴われ、兄弟と共に江戸下向。主君稲葉美濃守正則。

寛文五年（一六六五）七月　十歳　父寂翁死去。短命四十九歳。法名「心月院天誉源光日明大徳」。正則公の依頼で宝慶院宗悦を烏帽子親として元服、「吉永升雲寂厳子」と改名。

寛文六年（一六六六）十一歳　長崎に赴き、医業を相伝。

寛文七年（一六六七）十二歳　再び長崎へ差し遣わされ、六ケ年医業修行。

寛文十一年（一六七一）十六歳　江戸に帰参、主君に勤仕。

寛文十二年（一六七二）十七歳　江嶋金窟の天女を深く信敬、参籠すること五十日、百日、半年と度々におよぶ。

延宝五年（一六七七）二十二歳　稲葉正則公に侍医を辞す願一封を出すも、公これを受けず。

延宝六年（一六七八）二十三歳　引き続き辞意願を止まず。

延宝七年（一六七九）二十四歳　辞意の願頻り、公甚だ立腹、勘気を被って退く。自ら「高嶋喜庵」と改名。武州八王寺村へ退き、留まることなく諸国へ。これより「隠医」のはじまりか。

＊十六年、諸国に往来すること定めなし。髭を剃らず異人の相となる。

＊母有宝寿院尼、麻布日ケ窪を居所とす。

延宝九年（一六八一）六月三日　二十六歳　医書『当流伝記要撮抜書』執筆、「陽向庵扁華軒 吉永升雲寂厳子」（同識語）。

＊この頃『阿蘭陀外科正伝』『軍陣金創秘極巻』『阿蘭陀外科明鑑』抜粋などの著作を世に出すか。
＊三十歳前後、那須の霊巌禅寺で一切経を閲覧す。
元禄元年（一六八八）三十三歳　父寂翁の供養のため弁才天像造立（後に「鵜木三弁才天」右尊）。
元禄六年（一六九三）三十八歳　相州江嶋弁才天女に祈願、二百日の海中行、金経弘道の誓願、感応霊験。この頃より金経の諸本（西大寺版、高野山版、朝鮮版、唐　版、諸国の書写本等）を蒐集し、本文校訂をなす。和訓・註訳。
同年十二月十八日（亥ノ日）　主君稲葉正則公より免許の告げあり。
同年十二月二十四日（巳ノ日）　主君の免許を蒙り、十六年を経て、巳の日に拝謁叶う。
元禄七年（一六九四）三十九歳　江嶋で再び勤行、感応霊験、行中に金経陀羅尼を修す。
＊天女へ神酒を献じ、神盞を下され、以後の飲酒は酒盛を結ばず、独盞。
同年五月下旬　母、好閑律師を戒師として剃髪。法名「宝寿院光誉弁心妙智」（「宝寿院妙智尼」）。
同年六月十日　母の看病にあたった弟子松嶋升順が頓死（十六年間浪居中の随従の弟子）。二十五歳。法名「大證院法誉常性升順」。
元禄八年（一六九五）二月　四十歳　升順を尊像として弁才天を雕像（座像三尺五寸）。母妙智尼の遺言により、同像を中尊に、夫寂翁を右尊（「心月盛満宇賀老神」）とし、母を左尊（「宝寿延命弁才天」）として、「鵜木三弁才天」（江戸）となす。
同年六月九日　弁才天像の点眼供養し、升順を祀る（一周忌）。
同年六月二十三日　升庵、母妙智尼へ、臨終一大事として、尊覚所伝の大事「即身弁才天秘法」を授く。
同年六月二十六日　朝、母妙智尼、升順の夢告（二十九日に往生、迎えの約諾）を受ける。
同年六月二十九日　母妙智尼、命終。六十五歳。江嶋御師間宮本右衛門による介抱。武州池上鵜木村光明寺に宮殿

下に埋葬、本尊三弁才天像を宮殿に安置す。この日より弟子家人（安田昌意、松田龍海、井上意格、玉木意春、太田五右衛門、道心者鶴翁ならびに下人四名武太夫、治兵衛、仁兵衛、勘助）三箇年供養す。

◆自元禄十年 至正徳三年 四十一二歳から五十七八歳

元禄十年（一六九七）四十二歳　井伊直興公と同歳の厄年にして、心を合わせ彦根城鬼門にかつて造立せし鵜木弁才天を、領中の人民を施主として安置す。（「文書」重要文化財）。大洞山弁才天建立。新たに蛇形小像を作す。

同年七月　江嶋の金窟に参籠すること十日、亡父三十三回忌追福のため、岩屋の尊像を模刻す（座像一尺六寸半）。

＊同年九月六日　稲葉正則公、逝去。法名「潮信院殿泰翁元如大徳」。

同年十月晦日　右に加え、報恩のため今一尊を造立し追福、尊像の胎内に追福の記を籠める。寂紫四十二歳の大厄年。井伊直治も同年に付き大厄年。

同年十二月二十二日　さらに座像一尺六寸半を造立、七面弁才天と号して中尊とし、先の最初の一体を右に、次の一体を左に安置して供養す（後に一体は十月から四月まで江嶋仮殿の御留守居の本尊に、一体は江都駒込海蔵禅寺に盂蘭盆会大曼荼羅とともに寄附、一体は大久保氏へ譲渡）。

元禄十一年（一六九八）正月十七日　四十三歳　子ノ刻から十八日暁天におよび霊夢を感得す。

同年十二月二十四日　造立成る、秘尊として内道場に安置し、膽礼供養す。

宝永二年（一七〇五）六月一日　五十歳　宝永版所願、印刻（智満寺蔵宝永版経識語）。

宝永五年（一七〇八）八月廿二日　五十三歳　宝永版『金光明最勝王経』成就。金光明最勝王経一部十巻三十一品、呉音に片仮名を付して印刻、開版。また女人のために平仮名を付して一部十巻印刻、陀羅尼の仮字浄厳和尚（武州湯嶋霊雲寺開祖覚彦比丘）、経文の仮字密厳和尚、反相の図絵は阿存和尚、文字訂正は岸水庵、筆者は辻柳陰。智満寺蔵宝永版成就。

＊宝永八年三月七日、井伊直治、秋葉寺へ寄附の品中に『金光明最勝王経』の版木一部がこれに相当か。

宝永六年（一七〇九）八月二十六日　五十四歳　『最勝王経縁起』一巻、『同勤要』一巻、『同供養儀軌』一巻〈片仮字附一部／平仮字附一部〉印板出来。

宝永八年（一七一一）三月七日　五十六歳　井伊直興（直治）公寄附の目録内に「願主直治寂紫子、金光明最勝王経版木一部」とあり。

◆この頃、秋葉権現に『金光明最勝王経』の開版、および『金光明最勝王経曼荼羅』製作成就の歳月迄、室宅類焼を免れん事を祈願のため、秋葉山に参詣。一二鳥居建立、秋葉寺の住僧の求めにより額字を揮毫。

正徳元年（一七一一）八月十二日　五十六歳　霊雲寺蔵正徳版所願、印刻。　＊四月二十五日改元「正徳」

＊正徳版本に同日は己巳日で大吉祥日とあり。

正徳三年（一七一三）正月十一日　五十八歳　『金光明最勝王経』一部十巻印刻、開版。陀羅尼梵音は覺彦和尚（浄巌）、和訓の点は天仙和尚、変相の図絵は黒川元壽齋、真字の筆執は辻柳陰齋、片仮字筆執は遠山孝生齋。経師は東都湯嶋日下荘兵衛。霊雲寺蔵正徳版成就。

＊正徳版本に同日は己丑日で摩訶吉祥日とあり。

◆この頃迄（四十頃より五十八歳迄）に、曼荼羅製作、狩野養卜・探信他諸家の画工、彩色・細金・七宝蒔き、三十八幅完成。

＊曼荼羅は寂紫居跡の覚樹王院に附属。

同年十一月　『金光明最勝王経』の経版・「宝塔曼荼羅」成就に付き、僧を集めて供養をなす。

同年十二月廿二日　室宅類焼す、成就事後のことなるは辨才天の御加護なりとす。

正徳五年（一七一五）十二月十五日　六十歳　天竺暹羅国の人より寄贈の天竺寺院の仏座石、猿江の寂紫の草庵に来着

す（漳州、長崎経由）。

享保二年（一七一七）六十二歳　井伊直興（直治）公逝去。法名「長寿院覚翁智性」。

享保三年（一七一八）六十三歳　清国へ、『金光明最勝王経』全部十人十巻（三十一品）の書写を依頼、成就、請来す。

＊大清康熙五十七年（一七一八）十月穀旦　江南蘇州、浙江湖州、杭州。

享保十六年（一七三一）七十六歳　最勝王経四朝（唐・宋・元・明蔵経）本、朝鮮本等数多検合、真言は梵漢併書、和訓に点を附し、一部十巻印刻。

享保二十年（一七三五）三月十七日　八十歳　猿江の居宅において酒宴の催が行われ、門弟・信友の集まるなか、書院に臥して眠るがごとく寂す。

＊三田寺町高嶋山歓喜寺佛乗院玉碑。

◆没後

元文三年（一七三八）六月九日　升栄、升庵三回忌に臨み、奉行所へ、「宝塔曼荼羅」開帳を願出。

七月

同年　八月十日から十月十日迄の五十日間　寂紫没後四年目、本所一ツ目高野寺大徳院において、大曼荼羅・佛座石等を開帳。

宝暦十年（一七六〇）九月吉日　秋葉寺第三十七世泰山任超和尚、『金光明最勝王経』一部十巻印刻。

宝暦十一年（一七六一）冬　版本『最勝王経略縁起』全二冊（墨付五十二丁）出版、吉永昌庵、版元・売出–山崎金兵衛、版本『最勝王経』折本十冊出版、吉永昌庵、版元・売出 山崎金兵衛

天明六年（一七八六）正月二十六日　湯嶋台より出火、覚樹王院が類焼、寂紫造立の経疏を多く焼失。

寛政二年（一七九〇）　弟子高嶋升栄、秋葉山に登山、参詣。鳥居の扁額に遺る師升庵の筆を拝す。この時点まで鳥

居・額字等の存する。

同年五月二十五日　弟子高嶋升栄、本所一ツ目町宅において寂す（九十四歳）。

（こじま　やすこ・鶴見大学仏教文化研究所特任研究員）